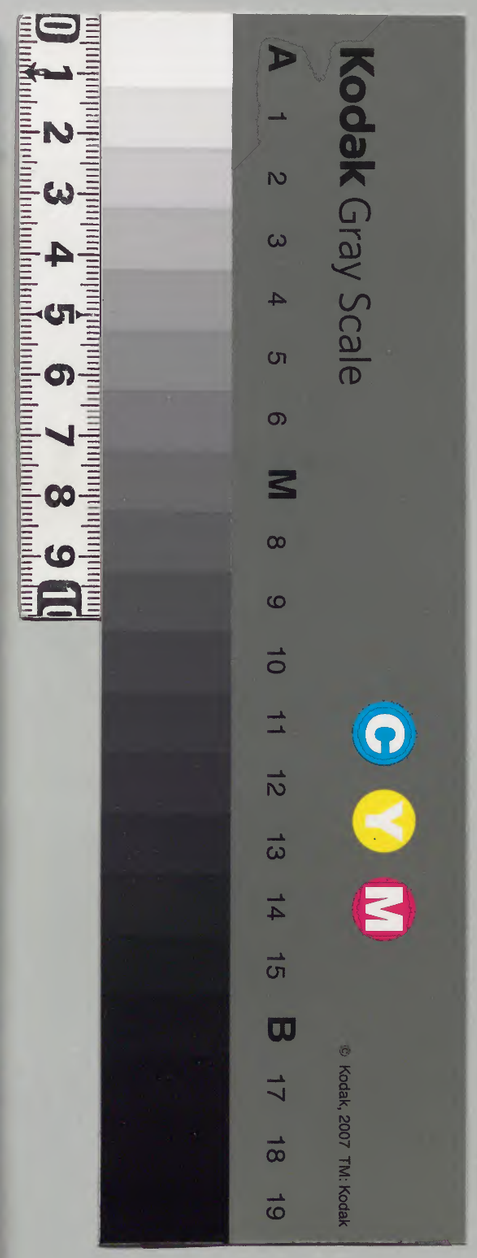
日本書紀傳 六卷 中

和書
一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (18)
函號 特 85 1



国立公文書館
National Archives of Japan

文部省
消印
文庫印

宮内省
消印
文庫

宮内省
文庫

る事ゑる更なり 沼河比賣の歌に阿和田岐能和加夜麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛と那賀尓伊波那佐牟流牟流遠曾陀多岐多と岐麻那賀理又須勢理毘賣命の御歌に阿和田岐能和加夜泥遠多久豆怒能斯路岐多陀牟岐曽陀多岐多と岐麻那賀理麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛と那賀迩伊遠斯那世と詠せ給へるなど組合と云狀なり

○産生洲国は古事記に以為生成国土と有り偖此は神世七代章に天地開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也と有に應へて洲国と疑固る可き物の浮漂へめり故に其洲国と成へき物實を産生して修理固成し給ふ玉とゝの御事なりし口訣に洲国依二神而成故曰産生と有は古意に非す二神の洲国と成べき物實を産生し給へるが其即国と成れり一者洲国は久尓都知と訓るに従ふ可し上に底下

内一二六八三號

豈無国歟云々と有る如く其時に瓊矛を指下して探給へりしかば先茲に磤馭盧島を得給へるに此い国中之柱と為る所にて有けれ二神の無国歟と宣へりしに其に非るが故に其嶋に降居て洲国を産生し給ふむとに思欲し成ぬるに其に磤馭盧島の時に二神に幼稚く渡らせ給ひしを此に其寿夫婦給ふ可き御盛年に成給へる故に産生し給ふむとに宣へる者あり彼瓊戈の滴瀝れるに凝聚りて其嶋の成れるを以て二神の産生し給へりし物實に涇渺の凝聚りて大に洲国の成れる事何の疑がはしき事

に有むに服部中庸が三大考に二柱神の此大に洲国を産給へる事を世人漢意を以見る故に此を信ずして種生賢しき説有れども其は皆私事あれば取に足ず唯古傳の任に心得べし唯人の児を生むに如く御腹より生給へる者あり但其奢しき狀は如何に有けむ傳無れば知難けれども今此を思ふに先天より降坐す時に天浮橋に立て瓊矛を以て彼漂在る物を攪成し給ひて引上給ふ時其矛の滴瀝に微うある物あれども其物に因て漂在る物聚り凝固り廣く大成て一嶋と成れるに其如くに二柱神の交合の滴瀝女神の御腹内に大に洲国を生給へる合凝り成て然て女神の御腹より出し給ふ所に微に其物に彼漂在る物の寄聚り凝て国土に成れる有り迚く人身の成れる始に知べし父母の交合の時に滴瀝る物に微るに月を経て児の形と成れ非ずや」と云る所実に然る説有り

○産生を記に生成と作る字美に得身に身體を得に係り那須に名為に身體の成出るを云事有るが

通ハ一て宇年を那須と云ひ那須を宇年と云故ハ生
字を宇年ハも那須ハも用ひたる事常なり又宇年ハ
ハ産字を多く用ひ那須ハハ成字を專と用ひたり但産
字を那須とハ訓ず成字を宇年とハ訓ざるハ其産ハ
産も成も正しく其言ハ充當ハる字なる故なり産ハ
古事記訶志比ハ其御子者阿礼坐故号其御子生地謂
宮殿ハ宇美也と有を御紀ハも曰宇瀰と作る是なり又新撰
字鏡ハ祇以酬祀司命也宇年須此万豆利と有ハ産靈
祭と云事なり神名式ハ尾張国葉栗郡宇夫須那神社
有ハ産土神社と云事なり又天孫降臨章第一一書ハ
吾子孫可王之地也と有を敏達天皇十年御紀ハ子と

孫ハ見えたる註ハ古語云生児八十綿連と有ハ宇美能
古と訓ハたるハ當ハり又雄略天皇九年御紀ハ産児
を宇麻波理と訓る宇麻ハ産波理ハ廣ハて産廣ハぐる
事なり又御紀ハ猶及蔓生字なりとも然訓る共ハ同
有て歌ハ箇利古武と有り又麻を績なりの績なり共
ハ同ト猶宇年と宇麻志と同トき由傳三傳四可美葦
牙彦舅尊の下ハ云り生を那須と訓ハ古事記ハ於高天原成神
名云と此三柱神者並獨神成坐而隱身坐也なり見え
たる成又神世七代章ハ便化為神とも自有化生之神
とも始有俱生之神とも高天原所生神とも見え大祓
詞ハ国中ハ成出武天之益人等なり有ハ同ト但其ハ

△世九ハ人跡成事者難乎和久良遠ハ成吾身者又

自然の事あるハ此那須ハ成す方ハ就て云語あり万葉九三十三十ハ父母賀成乃任尓又記傳ハ引れたる竹取物語ハ己が成さぬ子あれハ心ハ也従ハず空穂藤原君卷ハ此春子一人成して竟れ坐ハき」と有るど此等ハ生るゝ事を那須と云るなるハ傳ハ生成ハ唯生む事ハ其を成とも添て詔へる由ハ註されたれども右ハ意ハ別てハ云る如く宇年と那須と以異有る事あり瑞珠盟約章ハ生を宇年と常の如く訓る其第一ノ一書ハ汝所生児云々生児云々第二ノ一書ハ生女云々生男云々化生神云々第三ノ一書ハ化生男あど有て何れも生を那須那流と訓り今も那伝奴親那佐奴子那佐奴中るど佐ハも云事あり偖此成るどの事ハ傳五所生及神名と云所の傳ハ委しく云りき

○為国中之柱ハ

△うゝ予ハ記傳の訓ハ従ひて天之御柱遠見立て云べゝ所思ひる其兵ハの矢之御柱と云ハ我が磐駅盧嶋奇字を換ハ此天之御柱ハ擬ひて五岳の天柱をも立給る歟ハ思ひれハゞ

第一ノ一書ハ降居彼島化作八尋之殿化竪天柱也と見え古事記ハ見立天之御柱見立八尋殿と有る是ハ舊事紀ハ則以天瓊矛指立於磯駅盧嶋之上以為国中之天柱也と有を以て此国中之柱即天柱ハる事を暁る可し然れハ国中之柱と云るハ国中之天柱と云を切めて短く云るあり次ハ引る私記ハ唯ハ国柱と耳有り平田翁説ハ見立天之御柱と有る其ハ擬て国之御柱をも然云る由ハ云れたるハ然る言あるべし釈述義ハ私記曰問何故謂之国中或答言以此嶋為国中之柱也或説此嶋正価天地之中故云国中者其非也又問此柱何物哉答古説云天神所賜瓊矛既探得磯駅盧嶋畢即以其矛衝立此嶋為国柱也即

其矛化為小山也と見えたる此に依て国中に天地の正中に値るとゝ云ふに非ず国土の中なる事明らけし偖此古説に右の旧事紀と同トきが倪古書に然る傳の有を取れるあり右の二説を合せて思ふに二神の礒馭盧嶋を探得坐しに平坦なる地ありけむを其中心に彼瓊矛を衝立給ひて天之御柱に擬らへて国中之柱と云ひ成し給へる者なり古史徴に其矛に八尋殿の御柱と為て二柱神の御世過て後なる事論ひ御世の限り住坐る者を即其矛云々と云べき謂無し其小山と化れるに二柱神の御世過て後なる事論ひ無しと有に右の類例に出雲風土記なる国引文に今然る言あり

者国引訖詔而意宇杜尓御杖衝立而意恵登詔故之意宇と有て其細書に所謂意宇杜者郡家東北邊田中在経是也圍八歩許其上有木以茂と見えたる此御杖即御矛なるに塾と化れるを以て礒馭盧嶋の小山なる事疑ふ可に非ず又此文中に此而堅立加志者石見国と又国堅立加志者有伯耆国大神岳是也と有て何れも同トく物の化て山と成れるが此等の此上無く高しく大なるに国引の綱を結着る御舟を繋ぐ戦柯なるに故に矛なるの比に非るが故なり偖杖と矛と一物なる事に次偖国中之天柱として瓊矛を衝立給へりに云べし

しに八尋殿の心御柱と斟ひ立給へりし事なるが信難き書に有れども宝基本記に散見せる古傳に心御柱一名天御柱亦名忌柱亦名天御量柱云と是則

伊弉諾伊弉冊尊鎮府陰陽變通之本基諸神化生之心
臺也と有り（此の事実に契合するを思ふに決めて）杜撰に非る可し記傳に云て殿を造る事を云て先柱を云
へ於底津石根宮柱布刀斯理ありと古の常なり大殿祭
詞に天皇の御殿を造奉る事を云るに奥山乃大峻
小峻に立留木子斎部能斎斧子以伐採氏本末子波山
神に祭氏中間子持出来氏斎鉏子以斎柱立氏皇御孫
之命乃天之御翳日之御翳正造奉仕礼流瑞之御殿云
と如此事柱の事を取分て云り旦此れは下の柱を行
廻給ふ大礼を申す殿なる故に初めは其を立給ふ事を
先云置るあり と有が如し但予が説は已に祝詞講義
大殿祭詞に就て委しく
云れは其に位ね置つ 故今思ふに其瓊矛を衝立て
国中之天柱と為給ひて被唱和の御時に此柱を廻會
給ひて御妹妹と成給へるに也も此柱を極（アテ）と定給へる
事は一も因縁の事に非るを以見に其瓊矛は天神

の授賜へる御霊実あるを国中に衝立給へるは二柱
神等の神議を以て天神の御霊を国中に斎（此を以て云斎柱と云名は起りけり）鎮めて
大地の鎮めとは成し給へる者なり 其は古事記訶志比宮
殿に以其御杖衝立新羅国王之門即以墨江大神之
荒御魂為国守神而祭鎮還渡也と有て御杖を衝立て
国守神の御霊実と祭鎮め給へるも此の故事なるに
依せ給へりけむと所思ゆれば此事御紀に以所杖子樹於新羅
王之門と有り此を以て右に
杖と有は子なる事知べし 西蕃の古説にも天柱五
嶽の論有に就て其中岳と聞ゆるを主と為る事に云
ひ思ふめる事には有れども成務天皇御紀に以東西

為日縱以南北為日横山陽曰影面山陰曰背面と有て
大地の事ハ天日を以體として定むる古法ハて皇国
ハ万国の東方の元首ハ居て万国ハ君主たる耳なら
ず右の国中之天柱なども天神の御霊實を国守神て
祭鎮め給へる所なれば　餘四岳の此ハ非れば天柱
五岳の根本なる事云も更なり旦南西北中の天柱ハ
唯国土の骨幹として天柱ハ立給へりと雖も然る止
事無き珍宝なるぬを以て其勝劣の有べき事を暁る
可き者なり猶此下ハ此をも合せて天柱五岳の事を
註すを合せ読て暁る可し　西川正休説ハ此国在万国之東頸朝陽始照之地陽氣

発生之最初震雷奮起之先土と云る言あり但神代の古傳てハ無き外国の説ハ溺れたる言あ
痴者ハ大地の環の如く圓体なる物なれば何れを始
とし何れを終と云むと云めれども皇国より西ハ
親しく連聯て国多きを東方ハ何方迄も国無しと云
許り遥ハ国ハ隔れ遠く此を万国の東頸と云むも
然る事なるる耳なるず洋西人の皇国の事を記せるハ
凡世界国土の中ハ肥潤ひて樂しきハ其間ハ位して
より四十度の間ハ及ぶ所無し日本ハ緯三十度
万国の極東方の界なり天神如何なる御心ハ以て其国
を殊ハ恵給ひて周ハ烈しき大海を巡りて外国
の冠を防ぎ其地形を此方彼處へ立離して嶋を統国
へ合せし如くなる国々の産物を異ハして
ハ亘し通ハ世日本一国界の産を求めずして足
の餘りハ大なるすなう造りて国を実せしめ所
以ハ人民多く家居立並びうず豊饒ハして五穀ハ殊更
万国ハ卓越て人気勇烈強盛なる事外国ハ勝りハ
世界国土ハ比美無き事を記せるが如く此より西方
赤縣印度を経て西ハ至る任ハ次第ハ国土人物の醜方
めく識く芬り行て阿米利加なども云ハ至て其醜穢

の極あるを以て其首尾有事を知べし今年嘉永七年
彼醜国の夷共軍艦を連ねて来れるハ外国の書籍を
読ざる輩ハ志純一ハして大しも怖るゝ事無く神国
を待ずして鑿ハも為べき勢有て然すハ神国の大
御宝と甚頼もしく見えたるを有司の中ハ彼を知て
我を知ざる輩者共多く有て良も為れば彼ず毒計ハ
落入て開闢以来外夷ハ対ひて一度も恥うしめを
受ざる国格を乱らむと為しとろ世中ハ常夜往く心を
ちあめしろ征夷府の人ゝ右の如く有しうでも朝
廷より伊勢等の十社ハ奉幣を奉らせ給ふ大御詔の
中ハ雄々しく武く物為給へる事共の多く見えさせ
給へるあむ然すハ天神御子ハ坐けるそ天下の人
挙めて尊み奉れる事あり若る大御稜威の御盛ふ丈
笠くす上ハ万国の兵の限を合せて来ゝむとも怖れ
ハ非しと天下の人共の悦び合るも亦神隨ある事ハ
ありうし此ハ此ハ闢係ゝざる事あらゝ其驕ぎを見た
ハめ聞たり且ハ憤ろしうありけれ然れども其怕ハハ
心有て少ゝ記し置く者ありて

国中之天柱と云て我磯馭盧嶋一處ありつるを二神

尊先大八洲国を生給ひ然後ハ大地の全を修理固成
給ふとして我天柱ハ擬ひて立定め給へる故ハ自然
ハ東岳と字く可くハ成れるあり但其所在ハしも皇
国ある耳ところ顕ハハ見ゆれ外国とあるハ地中ハ幽
れて有故ハ神僊の位を得たる人ありでハ其霊容を
たみ伺ふ事能ハざる事と聞えて岳瀆名山記と云物
ハ東岳廣桑山在東海中青帝所都南岳長離山在南海
中赤帝所都西岳麗景山在西海中白帝所都北岳廣野
山在北海黒帝所都中岳崑崙山在九海中為天地心黄
帝所都四岳皆在昆命之四方巨海之中此五岳諸山皆神

仙所居五帝所理非世人之所到也と有り然れば我東
岳　　耳とう有れ他四岳の所在を推當に此ゞ
彼ゞと云むい甚可畏き事あり右の南岳西岳など云
あり然れば我が古語に南之御柱西之御柱などと云ハ漢土に傳へたる名
も為つ可き歟あり右の青帝赤帝白帝黒帝黄帝ハ風
父金水土の五元の神等なる可し此等の委しき事ハ
平田翁の赤縣大古傳天柱五岳餘論などに見えたり
右の東岳なる磯馭盧嶋ハ大地の最初に成れる故に
西蕃に此を祖山と云ひ其傍に在る淡路国を国生
の初に完成れる故に此を祖州とも云めり又印度に
須賣流山と云るも決く此山なり須賣流を翻訳して
統領の字義と成れとば大地を統領る天柱あるにも

彼祖山なるにも合ひ又瓊瓊杵の化れるにも叶へり其
ハ玉に八坂瓊之五百箇御統と云ひ和名抄に品星を
須八流とも云れば須賣流の梵語ハ此古言を傳へたり
ー者と所思ゆれば有り此等を以ても餘の四岳とハ
殊に勝れて我東岳の尊き事を明らむ可し右の祖山
遊の文に東日窟常陽之山掇搏桑之丹枹散若木之朱
華觀碧海挹東开過鬱池宮暘谷神王東海青竜君衆仙
陳丹爐朱実金津碧醴次登祖山觀芝田採養神草と有
る是なり祖州ハ東方朔が十洲記に祖州近在東海之
中地方五百里上有不死之草草形如蒲苗長三四尺人
已死三日者以草覆之皆當時活也と有る是なり右の
不死之草ハ解除に用ふる菅なる可し大祓詞講義矢津
菅曽條見べし右に須賣流山ハ長阿含の十二天餓軌
に大梵王者上天之主衆生之父也天帝釈者地居之主
と有る平田翁説に大梵王ハ皇産霊神に天帝釈ハ伊

幣諸尊ハ當ラ由ハ云れたるハ然る言あり長阿含経
ハ蘇迷盧山諸大神妙天之所居ニ止と有ハ此磯馭盧嶋
の天柱ハ天神の御霊実あるを聞傳へたるあり又
東方帝釈天と云るハ印度より皇国を大たれハ云るハ
る可し偖其帝釈を釈提婆因陀羅と云る其ハ亟天帝
ある由あるハ天柱ハ天地昇降の路あるハ其須賣
流山の神あるハ叶へり或人此須賣流山次ハ南西北
を北極亟下ある由ハ云るハ古意ハ非ず
の三岳ハ幽れて何れの地方ハ在とも詳ならぬを唯
其中岳あむ垂仁天皇御紀田道守が言ハ遠往絶域萬
里蹈浪遥度弱水是常世国則神仙秘匿俗非所臻と見
えたる此ありける常世と謂ゆる夜国と云域ハて
北極直下ハ在る地の心の邊の名あるが此を及ハ
て後ハ廣く外国を云称と成れるあり偖崑崙山

と云も漢名ハ磯馭盧山あどを訛れるハや其ハ二神
此東岳を立て大八洲国を生給へる後ハ蛭子淡洲の
未国形を成さゞりしハ其等の位置を成て万国を
羅列て大地を定させ給ハ玉として此四柱ハ見立給へりけ玉を
其ハ潮沫あどの寄附ハして終ハ大地の全ハ整へ
りけ玉と所思しけれハあり其ハ西岳ハも昆崙の名
岳ハ老子南遊の文ハ有を以知べし序ハ云南
九光之英火浣之布越赤津入大丹宮云く十洲記ハ炎
州在南海中有火林山と有り西岳ハ老子西遊の文ハ
西遊亀臺入七宝園観飛玄紫文過流精闕九靈金母大
素元君進玉文之柬其ハ実如餅と有る大素ハ白色ハて
玉母の内号あり西王母傳ハ金母元君一日西王母生
于神州與東王木公理二気而養育天地陶均万物矣云
昆崙玄圃閬風之園有金城千重玉樓十二瓊華之

闕元始天王授亀山九天之籙使制召万霊統括真聖位配西方女子之登仙得道者成所隷焉と有て此れも昆命の名有り十洲記に云昆崚在西海之戌地北海之亥地地方一万里有弱水周回繞市此四角大山寔昆命之支輔也云々九光西王母之所治也と有れば北い弱水の続きわて中岳崑崙山に近き狀あり北岳い老子北遊の文に北游空洞山過洞陰宮云々十洲記に玄州在北海之中地方七千二百里上有太玄都仙伯真公所治云々あゞ見えたり此い赤縣太古傳に引て註されたる中に要て有る所を採て記せるあの委しくい本書に就て見べし但斯る事わも餘りに深入すれば却て彼を正として此の眞古傳に異義を云に至る人多ければ其等の輩に等しく右の名山記に在九成るべし口惜しき事ぞ心為べ

海中為天地心と云る九海い弱水ある可し大祓の東文忌寸献横刀時咒に北至弱水と有を玄中記に天下之弱者有崑崙之弱水と有を以九海ある事を知べ

し其を右の垂仁天皇御紀に弱を美と有れい字美と訓べし倩如此典和能水訓るい字に就て儲たるあるむうと思ひしを今考れば彼邊い一年の内に半い晝半い夜と成れる計り天日の光に蹟き所あれば月の光あゞい素より見えざる程ある可し備海水の潮汐いしも月の出没に隨ふ事に有ければ日光を受ざる所い海水の往来無くして池沼に留れる水の如くあれば弱水と云事實に叶へる称なりし同し皇国の内にても南海の潮汐い強く甚しきを北海の潮汐い弱く又き故に工人い北海に潮汐い無き事と思ふめり北海に潮汐の無きに非す月行の線よりい良遠きが故あり或書に海水潮汐何也月為陰精與水同物亢寰宇之内湿潤陰寒皆月主之既其同物勢當相就月為湿本湿能下施故對月而得水為月既下濟

水亦上行欲就千日故日輪所至水為之長而成潮汐
也当潮長時江河溪間以及盃盎無處不長長則気入水
為之軽潮降気出水復故重今人以餅盛水毎日推之軽
重不等則潮外時軽潮降時重耳云々由此而言月為水
主日輪所在諸水上外海潮應月期著明矣云々を知べ
き者有を考へて弱水い潮汐無く澱める水あるき者有
り其常世国を新井君美が蓋指耽羅国而言今朝鮮地
方唯此鳴産相接あるど云るい例の儒者風の強説わて
取わ足ず耽羅い後わ皇朝わも所知者し地ある乎何
どて迂遠ある常世国の称を以て記されむや此非時
者菓ハしも常世国ある神仙の秘区わ在し物ある乎
此時わ始て顕国わ出ある い聖帝の神霊わ勅て仇俗
の臻るまじき所わ行得て賜ハり取帰れるあれば其

所在の如きも仇俗ある一書生あどの知べきわハ非
るあり偖其常世国ハ河図括地象及河図始開図等わ
ハ極之唐東西云と南北云と昆命山為天柱為地首一
日昆命丘一曰昆命虚氣上通天地之中也上為天鎮横
為地軸立為八極満為四瀆地下有四柱廣十万里有三
千六百軸犬牙相牽名山大川孔穴相通有五色水出五
色雲其山中應于天之最中蓋帝之下都聖仙之所集神
物之所生四維多玉乃鍾山是也と有る應于天之最中
ハ天極わ應ずるあり此の東岳磯取盧嶋の天日わ應
ずるわ同じ又四維多玉と有も此の東岳の形状わ同

卜然れば此を以て南岳西岳北岳も四維多玉と云狀
ある を思ふ可し 又氣上通天と云も上に説る天浮橋
猶為地軸と有ハ国中之柱とも天柱とも国柱とも云
に合り帝之下都ハ山海経に昆命虛云て是謂太帝之
居衆帝自所上下立而無景呼而無響蓋天地之中也と
有る太帝の下都に其ハ天皇太帝に坐し其天皇太
帝ハ平田翁の伊弉諾尊ある由定め云ひたるが如く
あるが旁由有り但右の河圖括地象河圖始開圖ハ赤
縣大古傳に校して引ひたるを出せり本書の任あて
ハ所と互に得失有て一と方弁へむも煩くハしけれ
ばとて 然れども大地の形勢ハしも天日の縱横に依
て定むる事にて有れば此に先以磯馭盧嶋為国中之
柱と有て此を祖とし本と為る事あれば西蕃に祖山
と傳たる事我古説に叶ひて甚愛たきを其中岳ハし

も大地の背面の方に天進り立て天極に向へるあれ
ハ亜て尊きを其ハ何の為ぞと云に我が東岳ハ晝夜
を成て一年を為す表あり南西北ハ此に從ふ可し中
岳ハ其公私の運動の間に昇降して寒暑を別ち四季
を定むる標あり漢籍春秋保建圖に天皇干是斟元陳
樞以立易威と有る易威ハ易に生ると謂易と有る如く
此大地の運動き易に依て万物の生く繁茂する事
あるが其ハ天日と大地と天極と地心と相應ずるが
故あり五岳ハ此の表ある事知べし漢武内傳に天皇
氏觀六合瞻河海之長短察五山之高卑立天柱而安於

地理植五岳而擬於鎮輔と有を以て天柱五岳の皆が
ら出来りしハ河海丘山の有て後ある事を知べし然
れば此ハ此磯馭盧嶋為国中之柱と有ハ何の御心も
坐ずて唯国中の天柱と為て其中心ハ天瓊矛を祭
鎮めて天神の御霊奠とて斎奉給へるが後ハ南西北中
の四岳を定給へるハ就ていハ東岳ハ當るを国も其實ハ
万国の東頭元首ある祖州の中ハ在る祖山ハ是れば其ハ擬ひて
右の四岳ハ立給へるを西蕃ハ其差別迄の委しく
事ハ傳ハるざりしうば擬於鎮輔とハ云るハて奠の
鎮輔の我が磯馭盧嶋ハ有りとハ知るれざりし故あり

十洲記ハ大上名山鼎千五方鎮地理也と有も是あり
此等の説ハしも赤縣大古傳天柱五岳餘論ハ云れたれ
るも多在れど予が取る意次異ある故ハ此ハ如此義
脛しく云あり見ハ人其心して内外を取失ひて予が
意を取誤る事勿れ天柱五岳と云中ハ南西北の三岳
ハ蠻夷の中ハ在と雖も其所在ハ幽て神の秘の匿と
成れこば何国の如何ある地と知る西無く又中岳
ハ地心ハ在と雖も水を隔て又氷海氷山の中ハ幽れ
子なる神域ハ有ければ西蕃ハ河圖括地象及淮南
地形訓ハ正地玄州曰成土と云ひ印度ハ此を北
倶盧洲と云ひ貝留蘭土と云ひて具呂年持須とも云て譜
四る夜国と云地あり ければ唯其地 有と云耳ハて
実ハ見なる人無きを我磯馭盧嶋ハ云も右ハ云る如
く今も現ハ淡路国の西北ハ在て現世の正目ハ唯ハ
見解る所ハ在ハ実ハ辱く尊き事あり然れば外国ハ
どよりと云ハば唯神国ある耳ある〻ず皇国ハ今も神代
ある者ある
けり ○陽神陰神の陽陰ハ遠賣と訓べし神世七
代章ハ陰陽不分と見え次ある雄元雌元を第一ノ一書

の陽元陰元と記されて陰陽始遘合為夫婦あゞ見
えたる何れも賣遠と訓より外有べからず夫婦を俗
の賣遠登と云ふも女男人の義にて其相配へるを以
云称あり古事記須勢理毘賣命の御歌に阿賀流冨久
迩奴斯許曽波遠迩迩伊麻世婆と遠の男と夫とを兼て
宣ひ阿波母賣迩斯阿礼婆那遠岐氏遠迩波那志那遠迩岐氏
都麻波那志と賣の女と婦とを兼て歌ひ給へる此を
以て夫婦の事を賣遠と云を知べし古今集序にも此
の二神の事を天浮橋の許にて女神男神と成給へる
時云々と有も二神の男女に成給ふ謂にあらず夫婦

と為給へる事を申せるなり和名抄夫妻美乃夫和名
れども夫の本語は遠なり後夫を宇波乎前夫を之太
字と有を以知べし妻和名米と有る其の對へる言の
るを思ふ可し又陽神陰神を所に依ては彦神姫神とも訓べ
し傳五三十六丁の天伊佐奈彦神天伊佐奈姫神とも申す
由註せる上の釋秘訓に載たる私記の一説に安氏説
陽神読比古神陰神読比賣神下皆倣之と見え夫婦に
然云ふ風神祭詞に比古神尓云々比賣神尓云々万葉
九サニ丁筑波山歌に男神毛許賜女神毛千羽日給而と
有なども是なり嬬妻に對へて其夫を日子遅神と申
す定格なるをも又思ふ可き者なりし日子遅の遅は崇辞にて

〇下の雄元雌元と有る下の元を見合す可し

男を尊として云ふ説ある事古事記傳に註されたるが如し此天を日子遲と云も化人に云さめける事に云さめこそ記に其神之嫡后須勢理毘賣命甚爲嫉妬故其日子遲神云々と見えたれば嫡后に正しく對へ云ふ説あり

○左旋右旋は古事記に如此云期乃詔汝者自右廻逢我者自左廻逢約竟以廻と有て男神の指揮に依れるを此に略きたるなり第一の一書も右の如くなるを其も即將巡天柱約束曰妹自左巡吾當右巡云々と有て下に改後巡狩云々と有は誤なる可し其は其處にも婦人之辭其已立揚宇と見え古事記にも女人先言不良とこそは見えなれ巡柱の事に混ひ無れば決く傳の誤なる事云も更なり古史徵に右の一書を取られて此は謂有る事の由に云れたれども予は知あらず其は天

地の初より男は天に女は地に天は陽に婦は陰に其位定れる事二神の豈所知者ざらめやも此に陰神の言先立坐しは御心の速く感動うせ給へる故なる事下に云るが如しム左右は通證に

古傳望之朝南面仰觀則日月相望於東西東爲左左日足也東日首也西爲右右見限也西日往也と云る實に然る可し彼以東西爲日縱と有る如く東を首とし西を尾と爲る事なれば東を以て奥堀とし西を以て端緒と爲るが故に万葉に左手を奥手と云り古事記に左御手の手纏に所成る神を奥疎神奥津那藝佐毘古神奥津甲斐辨羅神と有る其に奥と申すは左手の物に依て成坐ればなり又右御手の手纏に所成る神

○口訣に左旋右旋陰陽自然之性也と有も謂ひなる言なる者をや

○比陀理美岐理と訓べし大同類聚方に枳聞波牟奈倭介乃美岐刺仁阿刺天と見え世奈申稔乃味記美支刺非殷刺に曾比天云々又美伎里日堂里比登志久云々又記傳に引れたる伊勢の亭子院歌合日記に上

を邊踈神邊津那藝佐毘古神邊津甲斐辨羅神と申す
も左の奥あるを對へて右を邊と云ふ云あり和名抄
に（芳邑切韻云）增登堂級也（俗為階下波之一訓之奈）兼名苑云砌一名階（訓美と岐利と）
見えたる階は堂の邊あるを美岐利と云事甚能合へ
る者あり然れば左は日足（ヒタリ）て奥あり右は見限（ミギリ）て
邊（ヘ）あり端（イヒ）る事知べし　猶古事記に於左手所成神名志
羽山津見神と有る志藝山津見神次於右手所成神名
此云之伎と有れども其は借字にて繁山あり羽山
同章に麓山足日麓此云鄭耶麼と有て繁山は内
麓山は外（ソト）あるあり又於左足所成神名原山津見神次
於右足所成神名戸山津見神と有る原山は字の如く
戸山は外山にて此も左右に就て自然に内外の意を
成（ナル）也
旋は身轉にて直行は多（スクナ）くして曲路を行事あり

（訓美と岐利と云ふ）

次に巡字をも然訓り四神出生章第一第十一の一
書に迴首と云て宝剣出現章第六の一書に大己貴神獨巡
造天孫降臨章第二の一書に故経津主神以岐神為鄉導
周流前平あと見え古事記には此の事を迴逢と有る
事上に引る如く又白檮原宮殿に直行を上章曲行
を迴幸と書し別なる事殊に明らかなる者あり此等
を以て旋は身轉（メグル）ある事を知べし（身を賣と云事は仁字惠字をも賣具年と云る其は身典にて彼と我との間を親しく共に為る義なれば身を賣と云るあり貝流は形狀の結ひ久流理とも久流とも云ひ物名に轉と云ひ反轉を云ふ久流あり同言の例にて糸を繰綿を繰などの用語亦此に等し）分巡国柱は二神同處に共に並び立して男

神ハ左すり女神ハ右より彼国中之柱と為給へりし
磤馭盧嶋（おのころしま）の中心を分れ巡給ふあり第一ノ一書ハ即將
巡天柱云々分巡相遇と見え古事記ハ吾與汝行廻逢
是天之御柱云々約竟以廻と有る是あり国中之柱ハ
中之天柱と云ひ釈紀ハ引る古記ハ国柱と云て即天
柱なる事上ハ已ハ委しく説註せれば其ハ就て知べ
きなり 備国柱を分巡らせ給ふ事ハしも彼天神の授寄
し給へりし天之瑞宝を衝立て国中之天柱と為給へ
るが即天神の御霊実を齎ひ鎮めて国守神と為給へ
る事已ハ上国中之柱條ハ云るが如し然れば此立給へる
御霊実の天柱を左右より旋（めぐ）せ給ふ事ハしも高皇

産霊尊神皇産霊尊二神の産霊ハ資て天中ハ一物を
産成し給へるハ則を取らせ給へるあり又今も見放
る如く天の左旋（ヒダリメグリ）し地の右動（ミギミトロ）める形象を天浮橋より
見行し坐て其ハ倣ハせ給へる者あり赤県太古傳ハ
天皇干是斟元陳樞以立易威と云文を引て天極地極
相反對して運行する廻ハ淮南子天文訓ハ大微者大
一之庭也紫宮者大一之居也紫宮執斗而左旋と有如
く北辰其所ハ居て左旋先導し北斗又此ハ共ひ法り
て左旋後從し又其七政を齎ふるハ依る事あり備
大地ハ此旋ハ反して右旋する者あり同書ハ帝張四
維運之以斗と云る帝ハ所謂天皇太帝ハて大地の四
方ハ被四柱岳を列張して四維を生ト其旋轉を北斗
の雌神ハ法り旋らし北斗の旋ハ北辰
大一の神機ハ依る事あるが又同書ハ北斗之神右雌
雄仲冬始建於子月從一辰雄左行雌右行仲夏合午謀
刑仲冬合子謀德と有り然れば夫ハ北斗の雄神ハ法

りて左旋し地は北斗の雌神を以ひて右旋する事疑ひ無し」と云れたり傳三に説る皇産霊神二柱の下に思ひ合す可し　記傳に伊弉諾合の初に先柱を行廻る事上代の大禮と所見たり此い男女遘合の初めして先此礼を行ひ給ふ事は甚て深き理有る事なる可し書紀に此天之御柱を国中之柱とも国柱とも云るを思ふ可し国土の生れる本元を此柱に負せたる名なりし云こ」と云れたる甚て深き理はしも先国中之柱はしも天御中主尊の御霊の鎮り坐り左旋右旋はしも高皇産霊尊神皇産霊尊の元氣天中にて左旋右旋して結び合給へるに神習はせ給へる者なる事決くあむ

有ける記傳に男女交合の狀男は上に在て天の如く舍に屋の覆ふが如し女は下に在て地の載るが如し舍に屋の如くなるを柱は中間に立て上下を固め持つ者なれば夫婦の間を固持つ理に由り有む鶺鴒の一名を麻那婆斯羅と云も學柱に在て交合の意に取て号けたる也猶又思ふに柱と云名義は渡斯は間なる可し間人又万葉に相競間端ホと云るも端は借字にて間の意なり又古今に本も非ず草にも非ず竹の世の間に成ぬべくありし」と云哥も竹を木と草との間と云るなり斯て柱は屋と地との間に立る物なれば又橋も此岸と彼岸との間に渡せる名なり又俗言に妻問の最初に言を通はし初る媒を波斯加気と云も橋懸の意にて右の柱の事に通へり又著と云名も此物は必二相對ひ寄合て其用を為す物なれば夫婦の意に似たり又事の始を端と云も此巡柱の事に由有なり」と云れたるは然る言なるべく沢く天神に神習はせ給へる者なるべし　○同會一面

第一の一書に分巡相遇と見え古事記に約竟以迴時

之と有を合せて考るに二神の御面を會せて遇給ふにい有べうず其国中之天柱の一方の面に出會給ふ事ある故の譬へば天柱を中に立置て其北面に二神相並び立して其より陽神は左に東方に陰神は右に西方に交に行巡りて其南面に一に相遇給へる如きを同會一面といい記されたる故然れば同自給布と訓べきあり古史徴に引れたるにい御面宇會世給布と訓れたるにい二神の御面と思違へられたる者あり古事記に大宜辛熊神の須佐之男命の御所に参到り坐し所に其女須勢理毘賣出見為目合而相婚云々海宮殿に亦豊玉毘賣命思奇出見乃見感目合云々と有る其に合ひて甚旦しき狀に有れども此は国柱を体に取ての事にし有れば其に叶はず此に一の考有り古事記朝倉宮殿に即幸行其若日下王之許云々故都摩郡比之物云而賜八也於是若日下王令奏天皇背日幸行之事甚恐故已直参上而仕奉是以還上笠於宮云々と所見なる八御妻問の時に天皇の日に背きて幸行るを忌諱て還し奉り若日下王の御方に向ひ日に向ひ参到て仕奉うむと申給へるに而て神武天皇の御戦の時と云反復の事あるに神代より婚の大礼に日に向ひて物為る定の有に因准はせ給へる事あるが其始は何れの時う有む二神の故事に依せ給へる事明然ければ此時の巡柱に然為給ひけむ事申すも更あり若然あらむ

△此考成て後強て思ふに若元本は日面と有けむを二面に改書したる歟彼記面と云も天日に依れるを以て思ふに東方を日面とあど云語の有けむも知べからず東は日の首て見るし方ある故に登母あど云事の有けるなるべし

△欽明天皇十三年春徳天皇元年御紀あどに歴問を登那賣登布と訓るに唱問あるを以知べし

△可し此と事は異なれど外宮儀式帳に二所太神の御饌殿の御四隅に立白先菅蔵物忌湯結持給へる

△東白斛伯湯草湯種下始と有て或は神作り始知を有なる新宮あり

△其天神の御許に東方に日縦に向ひて給ひて婚ふる可き

の大礼を行ひ始め給へりけむ事更に疑ひ無き者あり

△陰神先唱曰陽神の御言を待敢給はずして言出給へるあり釈秘訓に私記曰問唱字訓読説〻如何答師説登那賣止讀之或説伊那那比氏又説都宜氏又説許登傳志氏而師説未詳と有れば古くより種〻ある訓の有来りしと見えたり登那賣は登那閉にて音那布の略なり久に言を傳ふるを音信と云ど如し傳言を許登と云も壱音の切れるあり言を音を云い万葉二に音耳毋名耳毋不絶云〻又捧

△継体天皇七年御紀に句大兄皇子親明の春日皇子云し口唱曰云と和唱曰云と有る口唱を久知と有る唱を加閉志字多氐と訓と和唱を加閉志字多志と訓り備

引壱尓聞而又喧島之音唱和の字は呂氏春秋と云る漢籍に言不欲先人唱而我唱和又陽唱而陰和と有を取〻れし者あり或説伊那那比氏は傳五二十九丁に註せる如く二神の相共に誘ひ合給ひて伊弉諾尊伊弉冊尊と申す御名定まれる事なれば唱字の訓は允に當る可し又説都宜氏は万葉二四十二丁に家知者任而毛將告あど多き語なれば然云むも僻事には非れども唱字の訓は迂遠し都具は告又託字など之理天者唱婦者隨と有など常に畫変あり常に伊に唱導也と見えたれば天下に有れども關尹子に天下伊那那布に叶へるあり又説許登傳志氏は言は先出るを云あり通證に引る万葉四五十七に事出之者誰言尓有鹿

わい二神西より分れて天柱の東面ハ會給へるあり△
可し　天日ハしを天照大神の所知看す所あるが天地
の初時より皇祖天神の神積り坐る域わ一有け
れば其天神の御許ハ東方ハ日縦ハ向ハ世給ひて婚
の大礼を行ひ始め給へりけむ事更ハ疑ひ無る可き
者あり　○陰神先唱曰ハ陽神の御言を待敢給ハず一
て言出給へるあり釈秘訓ハ私記曰問唱字訓読説
く如何答師説登那賣氏止讀之或説伊那那比氏又説
都宜氏又説許登傳志氏而師説未詳と有れば古くよ
り種々ある訓の有来り一と見えたり登那賣ハ登那
開ハて音那布の略なり久ハ言を傳ふるを音信と云
ゞ如し　備言を許登と云も色音の切れるあり言を音
を云ハ万葉二ハ音耳毋名耳毋不絶云と又梓

△欽明天皇十三年春徳天皇元年御紀あどり歴問を登那賣、登布と訓るハ唱問あるを以知べし

△此者元本ハ日面と有けむを二面ハ改書紀
ハ若元本ハ日面と有けむを二面ハ改書紀
たるハ彼影面と云も天日ハ依れるを
思ふハ東方を日面
あど云語の有けむも
知べ〻す東ハ日の
省て見る〻方ある
故ハ此登母あど云
事の有けるある可
し

△継体天皇七年御紀ハ勾大兄皇子親
執り春日皇女と云
口唱曰云と和唱曰云
こと有る口唱を久知
都字多氏と訓と和
唱を加閑志字多
志と訓り備

弓色尓聞而又喧島之音毋不所聞あど多ハ此
唱和の字ハ呂氏春秋と云る漢籍ハ言不欲先人唱而
我唱和又陽唱而陰和と　或説伊那那比氏ハ傳五二十九丁
有を取〻れし者あり
ハ註せる如く二神の相共ハ誘ひ合給ひて伊弉諾尊
伊弉冊尊と申す御名定まれる事あれば唱字の訓ハ
ハ允ハ當る可し　又説都宜氏ハ万葉二四十二丁ハ家知者
往而毛將告あと多き語あれば然云むも僻事ハハ非
れども唱字の訓ハハ迂遠一都具ハハ告又託字あど
を常ハ書変あり常ハ伊
那那布ハハ倡字を書事ハハ有れども關尹子ハ天下
之理天者唱婦者隨と有あどハ然訓べき所あり説文
ハ唱導也と見えたれば　又説許登傳志氏ハ言ハ先出
伊那那布ハ叶へるあり
るを云あり通證ハ引る万葉ハ事出之者誰言尓有鹿。

ム六帖ハ昔我ガ言出ハ爲てゝ日枝の山心弱くも飯う物うハ又源氏ゲ繪巻五十ハ用ひざらむ物くゝ報儀ラハ言出ぬも憂無しと思ゝて止ぬ寄生三十ハ心さしの程も知らせ奉ら可き一節ありむ百ら客易く言出へき事ぬも非ぬハ東屋三十ハ此度の頭ハ帝の御口づゝら言出給へるゝ口とも有り

十四代ハ阿我ニ多淫信子許知色部流可毛又和賀世古加ゲ左乃古止天

ゝ東舞歌章ハ「ヲ朝之言出者ゐゞ有る是ゐり」但右等の訓ハ此の義ハ當て古人の言傳たるハそうハ有けれ正しく字ハ當ハる訓ハ登那閑ハて然る可し。

○文選ハ言傳を美許各孝傳と訓ゝ殺文註詩を久紀訓るハ嘆読様如何注ハ言ハ相爲累口說話と有り儀右の東屋巻ハ許氏と有谷高邦の略教忠奉花俗字暴志衰物言ハ陽比事是巻私記る是ゐり

之記せ但養老記ニ阿比如流詩登と有れども此ハてい調を成さゞる耳ゐゝず詞も亦鄙俚くゝて此を神語とも所思えめ事ゐり古今集序ハ此歌天地開け始りける時より出来ハけり」と有る古註ハ天浮橋の許ハて婦神夫神と成給へるを云る歌ゐり」と有ハ此歌ゐるを化人の心ハも如何と思ふ計ハ拙うる可き筈ハ無けれハ必中古の人の僻訓ゐる者ゐり（撰者の御心い）漢文ハ書れたるこうハ有けれ其訓様ハ共爲夫婦を美斗能麻具波比と文章ハ文章ハして其訓を立て物爲給へるゐれハ其を共尓夫婦止爲氏と訓ていハ違へるを以て此も右の如き訓を用ひていハ其意を失ふ事ゐれハ古訓を求む可ゐり記傳ハ此唱和の御言を書紀ハ憙或遍可美少男烏其常一ノ一書ハ妍或可愛少男歟常五ノ一書ハ美哉善少男常十ノ一書ハ妍或可愛少男子と書るを此記と見合せて右何れも阿那迦（ハ阿那迦志夜志愛袁登古袁と有）夜（志）愛袁登古袁と訓べし袁登賣袁の方も同トく五言二句完の御言ゐり」てゝ云れたるハ従ひて右の誤訓を正す可き者ゐ

（十四代ハ阿我ニ多婆信子許知ニ都禰可毛又和賀世古加今左乃古止天）

と東舞歌章ハ今朝之言出者ゐぞ有る是ありと但右
等の訓ハ此の義ハ當て古人の言傳なるわろハ有
けれ正しく字ハ當ハる訓ハ登那閑ハて然る可し
意哉過可美次男爲を釈秘訓ハ私記曰問此読様如何
答阿那字礼志恵夜宇麻志袁登古ハ阿比奴是答私記
之説也但養老説云と阿比奴流許登と有れども此ハ
てハ調を成さゐる耳あらず詞も亦鄙俚（イヤシ）くして此を
神語とも所思えぬ事ありり古今集序ハ此歌天地開け
始めける時より出来ハけり」と有る古註ハ天浮橋の
許ハて婦神夫神と成給へるを云る歌ありり」と有ハ此

ハ六帖ハ昔我ガ言出ハ爲て〜日枝の山心弱く七飯う物うハ又源氏ゲ繪巻五十ハ用ひざらむ三十ハ用ひざらむ

ハ百う容易く言出べき事ハ非ぬハ東屋ハ此度の頭ハ帝の御口づから言出給へるを也と有り

歌ありを代人の心ハも如何と思ふ計ハ拙うる可き
筈ハ無けれハ必中古の人の僻訓ある者ありり（撰者の御心ハ）
漢文ハ書れたるころ有けれ其ハ訓様ハ共為夫婦を美
斗能麻具波比と文章ハ文章ハして其訓を立て物為
給へるあれハ其を共ハ夫婦止為と訓てハ違へる
を以て此も右の如き訓を用ひてハ其意を失ふ事ハ
れハ古訓を求む可ろり記傳ハ此唱和の御言を書紀ハハ意哉過
可美次男爲其常一ノ一書ハハ妍哉可愛次男歟常五ノ一
書ハハ美哉善次男常十ノ一書ハ妍哉可愛次男辛と書
るを此記と見合せて右何れも阿那迦（恵）夜愛袁登古袁（古袁と有）
と訓べし袁登賣袁の方も同じく五言二句宛の御言
あり」と云れたるハ従ひて右の誤訓を正す可き者な

△日本書紀ハ惠を喜ハ作リ惠喜相通ヘルヿ故ハリ

り其ハ神の御言などハ右の迩夜志を迩惠夜計めの違ひこと有り阿那迩惠夜を阿那宇礼志惠夜など然計め唱僻めて記さる可ハ非れバあり　○喜哉ハ第一の一書ハ妍哉此云阿那而惠夜と註し神武天皇御紀ハ妍哉此云鞅奈珥夜と見え第五の一書ハ美哉と有り舊事紀延佳本ハ意哉ハも妍哉ハも阿那迩夜志と訓たるハ古事記ハ依て私ハ物尋るある可し（右の訓註有る上ハ御紀ちるハ何れも阿那而惠夜と訓むが宜しうる可き何れハ訓ても五言二句ハ一ハ夜志と有を思ふハ二神の先と後と二度唱和し給へり時一度ハ惠夜一度ハ夜志と宣へるが共ハ傳ハれるある可し　阿那ハ記傳四十ハ古語拾遺ハ古語事之甚切称阿那と有り何事ハ在れ指當りて切ハ思ハる

△二神の相共ハ御顔の麗しきを見愛給へる御言ハて其而ハ陰神を那ホ媛命と宣給ひし迩也同じく御面貌の和やハらて美麗しきを申せるあり

を阿那云と云ひ神武天皇御紀ハ大醜此云鞅奈涕ハ你句と有り万葉ハハ多く痛と書り又伊勢物語ハ鬼早一口ハ喰てけり阿那夜と云ひ雷鳴る騒きハ得聞さめけりあるも云ひ後ハハ轉して阿良と也云あり」と有が如し傳五阿夜訶志古泥神の傳見る可し出雲風土記ハ竹葉動之云と男云動いそも有ハハ心の動くを阿夜とも阿用とも云ある可し阿那を又通ハして阿夜と云事古言ハ多在り而公玉を迩と云も其美麗しく光沢有を美称へたる言あると等しく物の色ハも香ハも言も得難ある味ハひの有を迩保比と云ハ迩の滋蔓てる義ハて同言なり万葉三　ハ狭丹頬相吾大王者十ノ十五丁

に左丹頬　経妹手忘登七（二十六丁）に雑豆臘漢女辛座而
十三（十六丁）に散鈎相者名曰者あど云ふ狭（サヲ）い發語丹い
此の迹に同じく頬相ハ出合（イフフ）て艶やうに赤く色の面
に出る事わて祝詞に御酒に醉赤くゝ坐を赤丹穂と
云ると同じ事あり然れば此の憙哉も妍哉も美哉も
右の義を含て書る字共あるあり（記傳に字書に憙悦也好也と註し
妍麗也美好也と注せれば憙字妍字ゞ迹てふ言ハい
當れる事と云ひたる然る言あり猶美哉の美字ハ醜の
反なれば彼大醜に菊へて大美哉と心得べし物語に
ゞに御顔の迹保比云ふことと云るハ其美麗しきを云ふ
るを思ひ（ヤマ）亘す可し恵夜ハ咲ハし哉（ヤ）あり通證に引る和名抄に
靨面小下也和名恵久保と見え笑顔を恵加保と云る

（方言葉ハ十六に開花鶯柔樹花能毋猪日迎母安奈何と有る何を一本に作れるに依て玉之緒琴に荷の説あるむと云れたる如何に其如くに安奈荷の義此と同じき事知べし）

（四神出生章に弟ニ書に巡柱之時陛神先発喜言と有を以て其狀を想像奉る可し）

（書き古語拾遺に哥樂とも）

（就て考るに紫神天皇の大御名を御間城入彦五十瑞彦猛天皇と申す御間城に御可失城也て大宮を称たる言あるが五十に物の読ハ〻足へる意に て瑞彦猛に此の而恵夜の例わて大御間の麗ハ〻大芸に由る事決し而恵と云を延て）

恵是あり宝鏡開始章あるに嬉樂を古事記に歓喜と作
るを共に恵良岐と訓るを口訣に笑遊せと注し万葉
十九（四十三丁）に千年保伎と吉等餘毛之恵良と云
有る恵良に笑咲ふ狀あり備此の而恵夜と云也其続
きの同じきハ十六（十五丁）に吾兄子者二布夫尓咲而立
麻為所見と有る二布夫に顔の艶ハしきを云ひ咲い
其笑めるを云あり十八（三十一丁）に尓布夫尓恵美天阿波
之多流云と有も夫婦の逢ふに互に顔に笑を
含む者あればあり此を以て思ふに古事記の阿那迹
夜志ハしも阿那迹恵夜志の義ある可ゞ所思えたる

八十三丁ノ吉哉歟恵不通十五丁ノ典志恵也久比等里母流歟波十七三丁ノ典思恵夜志餘志播阿良武曽

△面ノ面恵也吾背子十ノ思恵也安多良思

△立ノ吉飛斯宜志恵夜ヒ諸ノ下ノ附てヨリ十ノ吉持留心者吉恵ヒ有ノ同ト

其ハ万葉二十ハノ能嘆八師浦者無友縦畫屋師涵者無鞆又或本歌ノ吉咲八師浦者虽無縦恵夜思涵者虽無十三三丁ノ吉咲八師浦者無友吉畫矢寺磯者無友ノ

と恵夜志と続くる例あるを思ふ可し又吉咲八師を切めて万葉ノ十一ノ四恵也（寿之ヲ）ヒと云るも恵夜志の志を略けり者ノて此の阿那而恵夜の例あり但右の阿那而恵夜あヒい物物を愛て笑（エ）むあるヒ此吉咲八師又思恵夜あヒい物を嘲りて笑（ワラ）むあれヒも同ト可笑を善方ノも悪しき方ノも用ふノ等し

○遇可美次男鳥ハ愛（ウツクシ）衰登古衰と訓べし然れハ此ハ可美を（愛ノ）ノ當て書れたるあり第一第十ノ一書ノ可愛第五ノ一書ノ善天孫降臨章ある地名ノ日向（エ）と記されて可愛此云衰と注され（ウツクシ）衰と注され（ウツクシ）

可愛と有る下ノ可愛此云（ウツクシ）と見えたり神世七代章

第二ノ一書ノ可美此云于麻時と注されたる同じ可美字を此ノハ愛と訓べく書れたるを以て其義を知べき者あり但御紀の可愛ハ其字の意を以て書れたるを古事記ノ愛衰登古衰く有る愛ハ唯假字ノて音を耳取れる事記傳の説の如し

記傳四十ノ白檮原宮殿大御歌ノ延袁斯麻加年と有る延も可愛（エトメ）次女と云事ノ朝倉宮段大御歌ノ吉野を延斯怒と詠せ給ひ天智天皇御紀の童謡ノ善（ヨ）けむを多拖尼之曳雞（エケム）武と云ひ住吉日吉を比延と云ひ吉を延と云事古も今も然あり」と有る如く愛と云ハ傍の物ノ眼を着ずして一向ノ意ノ得て惟ぶ義ある事神武天皇御紀ノ迴望国狀曰妍

△釋述義ハ可愛先師説云因
而得也可愛念
之意也と有ハ
實然る事

哉乎国之獲無と有る獲エと善エと云ひ同じうさざれども
言の等しきを以て其意を合せ味ふ可き者あり五十音義
訣ハ曳ハ善の義ハて枳の曳即是あり然れば善ハ曳
と云が本語ハて余と云ハ却りて後ハるを枳ハ心ハ
好と為る物を枳と取義あり」と有ハ云ハれたり但得ハ
阿行善ハ夜行ハて別條あれども得を善と心得善を
得と思て違ハざるあり○次男此云鳥等孤ハ古事記ハ袁登古と
有て袁登賣の對あり同書ハ訓壯夫云袁等古記傳四
ナナハ万葉ハも壯士壯子あど書て若く壯ある男を
云ひ老なる若きを云ず男を摠て袁登古と云ひ後の
事あり」と有が如し意ハ袁ハ次字ハ當りて若き義ハ
り登ハ人あり此登の比を省きて登と云例多し袁登古と云
傍ハ人

△宝鍬出現章ハ
童女をも然訓せた
り和名抄ハ女日本紀
云ハ女和名平童女同
と見内然れバ女ホと
作れる本も有しある
可し

ある也俗ハ於登と云ひ妹を伊毛登と云ひ妹人ハ
ハ從父兄弟を伊登古と云ハ弥人子あり夫婦を夢遠
登と云ハ女男人の義あるを何れも登と云ひ又人の
長たるを袁登那と云ふ那ハ和名抄ハ翁を於岐
奈姫を於無奈と云る奈ハて長の義あり然れば袁登
那ハ少人長ハて年の長たるを云あり源氏物語ハで
ハ袁登那毘なる云しと多く用ひたる
是あり然れば袁登ハ少人ある事著し古ハ此古の古
ハ同じく男を云称ある事傳五大戸摩彦尊條ハ註せるが如
伊邪那岐神又神漏岐命あど申す岐と同じ事あり神
武天皇御紀ハ磐排別之子又苞苴擔之子雄略天皇御
紀ハ水江浦嶋子あど男子の名ハ某之子と云る是ハ
ハ然るを後ハい男ハ多く彦と云ハ對へて女名ハ某
ハ子と号る言ハ同じ」ハけれども此ハ若く幼きを称へ
て子と云意ハ用ひ○次女此云鳥等咩ハ古事記ハ袁
なるハて別あり

登賣と有り（記傳四）を袁登古の對（ふて）若く盛なる女を云称なり方言葉ハい處女未通女など書れバ未夫ハ嫁ぬを云ハ似たれども然らず既ハ嫁たるを云ふ倭建命御歌ハ袁登賣能登許能辨尓云と有る此袁登賣ハ美夜受比賣ハて既ハ御合坐る後の事なり又輕太子の輕大郎女ハ新て後の御歌ハ迦流能袁登賣と詠給へる此ハ嫁て後を云ハ又童なるをも云る事多し袁登古とハ童なるをバ云ず（中）昔ハも元服為るを袁登古ハ成と云ふても知べし然るハ女ハ童なるハも（袁登賣と云ハ）一向ハ若きを賞る故ハや有む」と有ハて通えたり右の袁登古ハ童なるハ男奥那と云ける（天皇二年御紀ハ童男）ハ中景行此云鳥具奈と有り鳥具那ハ男（ハ名ハて女高名）命の文ハ同トなる可し古事記を見ハ倭建命を倭男具那命と申せるハ（御紀ハ熊襲を討平ハ往坐）し所ハ日本武尊解髮作童女姿と有て川上梟師を刺殺給へるハ汝尊誰人也（對曰云と名日本童男也と）有を見れバ童男ハ對ハて（賣具那とも云べき狀なれども）然る言無れバ童女を袁登賣と云りしハところ賣ハ比賣の賣ハ同トく女を云称なる事傳五（大戸摩姫尊）ハ註せるが如し伊邪那美神又神淌美命など申す美と同ト事なり神名人名などハ某女と云ハ多き即是なり○終の袁ハ當て爲字を上の遇字ハ合せて用ひられたる（歎息を含ミて）心其意上ハ復るハ故なり記傳四（十）ハ引れたる須佐之男命の御歌（終）ハ曾能夜弭賀岐袁倭建命

の御歌の末を続たるハ此迩波登袁加袁若撃宮殿大御歌ハ阿布夜袁登袁加袁のハ余ハ通ふと見て也濟事ハハ有れども然耳ハハ有べからず其意の言外ハ溢る計あるハ言ハ述べき方無れば袁の辞以て此を終めて主と有る上の言の上ハ係る意味あり阿那而惠夜て宣ひ出たる二神の其時の大御心ハ如何計有けむ想像り奉りて味ふ可き事あり然れば此の愛袁登袁又愛袁登袁の袁を姑く阿那而惠夜の上ハ回らして心得べし 爲ハ字書ハ意揚と見えたれば其意を以て書れたる可し一書ハ歟と有ハ語末之辞と語之餘とも有れば爲字の方正しく當れる あり ○第一一書及

古事記ハハ陰神の如此唱給へる後ハ陽神の御和有て必其如くある可を此と第五第十の一書ハハ其傍耳を擧られたるハ事略なる記し様あり此ハ蛭児を淡洲と淡路洲とを此ハ打混ぜ神ありとして四神出生章ハ逆られたる故ハ此ハ其ハ蕃合の事ハ無めし申を知せむとて の私意ある可し 故巡則陽神先唱曰云と有を以知れたり第十ノ一書ハハ陰神先唱曰云と便捷陽神之手遂為夫婦と有て此ハハ全く陽神の御和ハ及ばざりし様あり けるこそ不足ぬ事あり けれ又此も第五ノ一書も次ある度ハハ陽神の御唱耳有て陰神

合事紀ハ此紀を引るハ両方共ハ唱和を偏さず記せり蓋ハ然有べき事あり

の御和無きも漢文体ハ事を約められたる可けれど物ハこゝろ依れ斯る止事無き大義を聚捨し給ハ玉事なるハ有べからしくも思えぬ事共なり○陽神不悅云といい言痛し第一一書ハハ此事無く古事記ハい各言之後告其妹曰女人先言不良雖然久美度迩興而と有が如くなる可ゑり其ハ其時ハ當て男女前後の理迩ハ所思し着す何と無く御心ハ落着ざる所有ハ依て女人先言不良と迩い宣へりしなれども其何の故とハ所思し跡(ムベ)ゝせざりし故ハ御合し給へりしが礙して生坐る御子良ハしうゝざりしうゝば天神ハ太占ハト相申給ひて愈女人を言先立しハ依て不良といい所思し定め給ひて

又更ハ復り降ゝして改旋ゝむとい所思し成めるゑり然るを此ハハ始終共ハ天神の御事ハ略ゝれて此二神の御上耳の狀ハ書されたる故ハ斯る私事も交わる者なり又次度ハ陽神の方耳を記されて陰神の御和を略ゝれたる其も此と同ト狀なる私事なり(伊弉諾ノ)○陽神不悅曰の悅ハ四神出生章第二一書ハ伊弉諾冊尊巡(柱之時陰神先発喜言既違陰陽之理と有る如く陽神の御方より先御言を発給へゝむわい打合て宜しうる可を今ハ其反ある故ハ悅び給ハざりし者なり其ハ次ハ云べし此下ハも先以淡路洲爲胞所示咲云ゝと見えたるも此と同し意ハ云る悅字を余呂許布と訓い寄来合の義なり其ハ

○然れば得ても凶ゐ不足物事ゐハ不悅と云るあり次ゐ所不快せと有を合せて更其ハ文あるを思ふ可

△あり古事記ハ於是天神諸命以ち期天沼矛而言依賜せ又汝命者所知高天原事依而賜也あり有ニ委古書中計ら知す多在り又

余呂古布ゐハ快字喜字又歡喜等の字を用ふる事ゐれども其本義を云時ハ物を得て心ゐ悅ぶあり其ハ事の具足へるを第二一書ゐ得磯馭廬嶋則按冠而喜之曰善乎国之在矣と有ハ国を得て喜ばしきあり四神出生章ゐ於是共生日神云と故二神喜曰云しハ貴御子を生得生て喜坐しあり同第十一一書ゐ保食神の身より化れる物を奉進る所ゐ天照太神喜之曰是物者則顯見蒼生可食而活也と有ハ物を受得て喜ひ給へるあり人ゐ物を寄て任すを事依と云ひ他より物の調ひ来るを寄と云ふ万葉一ゝ十九ゐ山神乃奉御調等云と川之神母

△見元ニゐ宜名倍六ゐ宜名倍見者誤之ゑど

大御食尓仕奉等云と有て下ゐ山川母依氏奉流神乃御代鴨と結ひ万歌ゐ山川毛因而仕流神長柄と詠ニ又サニゐ天地毛縁而有許曽と先云て後ゐ新代登泉乃河尓持越流眞木乃都麻手手百不足五十日太尓作泝良牟伊蘓波久見者神隨尓有之と云る義是ありゆゑれば余呂許布の余呂も此の事依又縁而云と云と同言あるを先知て其義を明らむ可善悪の善を余呂斯と云も同詞ゐて其具足へる狀を云ゐ万葉一ゐ取與呂布天乃香具山と続けさせ給へるも形の具足るを以て有ゐ具足を余呂比とてゐでも物を多く寄せ着て形容の具足へる故の名あり又藤原宮御井歌ゐ耳為之青菅山者云と宜名倍神佐備立有と有る宜名倍の名倍ハ並ゐて具足へる物の並ふあり許比を

△傳十四卷念然の下ふ云る事有り考ふ可し

来合(コビ)又徒合(ヒ)あり と云ハ大殿祭詞別ハ神等能伊須呂許比阿礼坐と有る伊ハ往(イ)ハて交来合(スロコビ)あると同じ事あり人ハ媚(コビル)と云も来合ハて向の人(ノ心)ハ合せて物を謀るを云て皆同じ事あり右の須呂許比と余呂許許比と相反對へる由ハ已ハ其講義ハ委しく記せるが如きあり△然れば陰陽の理の隨ハ喜言を発給へるむハ陽神の御心ハ往合て宜しきを然 有ざゆ故ハ不悅とハ記されたるハて謂ゆる御紀の地より云詞ある者あり物を得ハ其物と我と往合ふ義あるを曉りて悅の語の意を思ふ可くあむ○吾是男子ハ吾者(アレハ)男子尓坐(マスラヲニマセ)者と訓べし是字ハ意ハ存(メモ)ちて訓べうず

男子ハ古より麻須良袁と訓来れるハ依べし婦人を多和夜賣と云ハ對ひたる称あり唱和の御言ハ依れハ男子を鳥等孤婦人を鳥等咩と訓べ(きうと)も所思ゆれども其ハ女ハ男少女の字を用ひて其訓をさへハ詳されなれば此ハ然ハ訓まじき所あるを知べし和名抄ハ説文云男丈夫也(和名乃古)一云牙葉集云萬須良袁(良乎)大人之称也と所見なり能古と麻須良袁とも訓る其を取て和名抄ハ記されたるハ可し其ハ次ハ引く婦人の下ハ日本紀云と有れハあり備吾を阿禮と訓る義ハ下ある吾身(瑞珠盟約章ハ男を袁汝身の下ハ云べし)瑞珠盟約章第一ノ一書ハ日神本知素戔嗚尊有武健陵物之意云〻設大文武備云〻天孫

降臨章ハ武甕槌神進曰豈唯経津主神獨丈夫而吾非
丈夫者哉其辞氣慷慨神武天皇御紀ハ五瀬命云ヽ雄
詰之曰慨哉丈夫云ヽて有る初ハ武備と云ひ
中ハ辞氣慷慨と見え後ハ雄詰之と有を合
せて其義を知ハ足れり出雲風土記ハ吾御子麻須羅
神御子坐者所亡ち箭出来願坐尓時角弓箭隨水流出
尓時所生御子詔此者非吾弓箭詔而擲棄給又金弓箭
流出来即待取之坐而闇鬱窈哉詔而射通坐と有ハ益
荒神と云意ハ合へり万葉ハ多く丈夫と作き九三十
二ハ益荒夫とも益荒丁子とも有り又二十五十ハ

ハ麻須良多祁宇とも見えたり備麻須良衰の麻ハ眞
ハて須良ハ進む（勢の強き）ハ狀ある可し右（ハ引る）益荒夫より奈能進（コキノスミ）
尓と続きたると上ハ引る大殿祭詞別ハ伊須呂許比
の須呂ハ進（スヽ）又爰（スロ）の義有を思ふ可し然れバ益ハ備て書る者と見えた
り万葉九ハ須酒師競と有る須酒又進ハ同じくして
此の須良是なり又俗云須良理と云語の有も此ハ同
じ備此ハ唱和の御言ハ合せて少男（ラトコ）と宣ひても宜し
き所ハ唱神の言先立坐しを押へての事ある
故ハ殊更ハ麻須良衰とハ宣へる（者ハ猶傳十五百八十ハ又云を合せ見べし）ハ此を以ても古
悉く所謂有て乱りあ〳〵ざりし程知る可し然れバ今
人の読法ハ御紀を読奉ひハ古き訓を用ひあがら漢文読ハ
読すして有べきあり○理當先唱ハ先尓唱布可伎理也と訓べ、

△古事記伊邪河宮段ハ美知能宇志王桑弟波之河上之摩須郎女と有る摩須郎ハ丈夫の意ある事右ハ倒るが神名式ハ丹後国熊野郡粟良神社見ハ此を以て須良ハ本ハて麻ハ其ハ須良の意を強ある為ハ上ハ添れる言ある事を知べし又

△万葉十六ハ荒雄と事三處出たれ予ハ説ハ立ざる如くなれども上ハ引る如き例も有ハ捨難し

面白き事ハ奥能奈可能都年能已等加利可久左麻尓奈里伎尓家良之又十八傳二十一巻百九十九丁ハ理の例を擧たり考合す可し

理言割也と士清が云る實ハ其如くわて物の條理を割て云なり四神出生章第二一書ハ此事を遠陰陽之理と見え宝鏡開始章第二一書ハ以神逐之理逐之天孫降臨章第二一書ハ今者聞汝所言深有其理あり是なり万葉千公二十五丁ハ父母守見波多布刀久妻子見彼可奈之久米貝之宇都世美能余乃許等和利止云し後世の歌詞ハ條理ハ違ひて有ハトき事をも有り強て物為を和理那志と云るハ此反なり通證ハ凡事言以其理云和利奈之と有り無其理云和利奈之と有り故此ハ陰神ハ向ハせ給ひて當然なる條理を割て宣ひ解給ふ御言なり言を立るを言立と云ひ言を正るを言止と云如く言の條理

を分て云を言割と云なりけり○如何ハ陰神の言先立給ふを咎め給へる義を含めり常ハ物を問聽て如何と云とハ別わて此ハ上より壓へ云る語ある事ハ曾の辞を附云を以晩る可し天孫降臨章ある味耶高彦根神の言ハ何為誤我於七者と見えたる何為と同ト意味ハ見べし○婦人反先言ハ婦人能言先立給比都流と訓べし古事記ハ女人先言不良と有り偖此婦人ハ旧訓多和夜賣と有ハ從ふ可し麻須良袁ハ對へるなり釈秘訓ハ私記曰問多袁夜賣止讀其意如何答寧古事記ハ呼女人者称手弱女言女人者是手力弱之人也是古説而已と有り然れバ右の女人も當昔ハ多

和夜賣と訓りしかこの和名抄に婦人日本紀云手弱女人和名太乎夜末上同と有り上同に手弱女人の訓も上なる婦人の訓も同じとあり但太乎夜末の字い古ハ和と唱へたりし事次に云り　右の手弱女人の字ハ無仁天皇八十七年御紀に出たり古事記に我心清明故我所生之子得手弱女云し又汝者至有手弱女人與伊弉諾迦布神面勝神あと見え万葉四三十四丁に幼婦十二三丁に手弱女十五三十四丁に多和也女能ゐと記し其外ハ多く婦女と作り又御紀に瑞珠盟約章に女字を然訓し宝鏡開始章に婦女字をも訓たりき多ハ手弱の與和を倒反して云るなり古事記倭建命御歌に比波煩曽多和夜賀比那袁と有ハ弱細之手弱腕と云事にて美夜受比賣の手の嬬やさなる貌を歌ハしとあり万葉三四十五丁に手弱寸なと有る同じく男子を麻須良袁と云對にハ實に然有べき言なり又万葉四に幼婦常言雲知久手小童之哭耳泣管と有る手小童亦此に同じ和名抄に童和良波末冠之抄也と見え伝子師説和良倍波信童男女也童男子乃和良倍童女乃和良倍と有る童を和良波と云る和良ハ弱しき狀を云り童男童女共に幼き時の狀ハ手弱くして弱しく有が故に此稱有なり又波とも波信とも信と云るハ（書紀）部の意なり○先言ハ古事記を然り第一の一書に辭已先揚子と見えたり記傳四十に許登佐伎陀知氐と訓べし万葉十八十に春去者先鳴鳥乃嘆之事先立之君子之將待と有る事ハ借字にて言先立なりと有

△猶傳十五丁に委しく云べし

ムも先挙婦言葉不良子とも

が如しと事記高津宮殿か物云ふを言立と見えたり此の事を旧事紀ハ婦人先唱事既不祥ニ有り上ハ引る私説の一説ハ依バ唱を許登傳と訓りしかや ○事既不祥ハ天神御誓あゞを物為給ひしハ非ずと思ゆる歟亦り此の語勢天孫降臨章第二一書ハ大山祇神乃使二女持百机飲食奉進時皇孫謂姊者為醜不御而寵妹有国色引而幸之云々故磐長姫大慙而詛之曰假使天孫不作妾而御者生児永壽有如磐石之常存今既不然と有る今既不然の語ハ似たり其を古事記ハ大山津見神の御言として我之女二人奉由者使石長比賣者天神御子之命無雪零風吹恒如石而常石堅石不動坐亦使木花之佐久夜毘賣者如木花之栄栄坐宇氣比氐貢進云々故天神御子之御壽者木花之阿摩比能微坐と有り此ハ言と事との違ころ有けれ其錯ひハ有る事同ドきを思ふ可し但此の事を天神ハ誓ひあゞを物為給ハ有れども事既不祥と思ハ八給ふハハ必殊なる所由の無て言ハ有べうゝざるなり万葉五三十一ハ虚見倭国者皇神能伊都久志吉国言霊能佐吉播布国等加多利継伊比都賀比計理今世能人母許芽期等目前ハ見在知在と有ハ皇国ハ皇神の愛くしき国言霊の幸ハふ国て語継ぎ言継て今世の人も悉言霊の幸ハふ徴を目前ハ見なり知なり為る事とあり

十三ナ丁ノ葦原水穂国者神在隨事挙不為国虽然辞挙
叙吾為言幸眞福座跡恙無福座者荒浪有毛見登百重
波千重浪敷尓言上為吾反歌志貴島倭国者事霊之所
佐国叙眞福在與具と有ハ神在隨言挙為ぬ国ハ有
れども眞福く坐と　言挙為る言の幸の隨ハ恙く福
く在さハ存在アリッ作も見むと愈言挙為とあるあり短歌
ハハ其意を述て　長歌ハ云反れる倭国ハ言霊の所佐る国ゞ能眞福在
とあり言ハ事の用事ハ言の体ある者ハして相離れ
ぬ理あり所以ハ吉詞を述れば幸其ハ因て来り言過
てゞ殃其ハ屬て来る者あるを此あるハ陰神の喜言

けれハ傳二十二
巻六十一丁見る可

ハしも實ハ祥ハしき吉詞ハ有れども次序を乱り
給へりしが祥ハしきぬ事と成て哽咽淚を生せ
給ふハ至れりし者あり万葉十一ナ三丁ハ事霊八十
衢夕占問て詠るも八十衢ハ出て人の語るを聞て心
を占を定むるハて陽神の事既不祥と宣へる御心も
又其ハ迫き者あり仁明天皇御紀の長歌ハも事玉之當
国度曽云と詠なり俗ハ禁句と
て慎しミて云ざる類有り婚禮ハ太ハ返る重る舩
路ハて い歸る破るあどめ
ざる事あれども其時ハ取て い禁ハしき言ある故ハ
言改しむるを猶其ハ解うる事も有る者あり此を以
て言の慎しむ可き事を曉る可し猶言霊
の事ハ宝鏡開始章ハ就て委しく云べし　○不祥ハ第
五ノ一書（盈神出生章第十一書）ハも見えたるを共ハ佐賀那志と訓り釈秘訓

△此八八十矛神御歌の麻都夫佐迹と對へて布佐波受と宣へれば反具らざる意なりと見えたり傳十四百十ノ云べし先丁△花宴巻さミノ殊更めき持出たりを祥ハしらず先藤壺たりを思し出らる△澪雲巻三十五丁ノ公私の啓ミ

ノ私記曰師説佐賀那志止読之安氏説佐伊波比那志

案古事記云余訶良受と有り但此安氏説ハ如何あれど佐賀那志も余訶良受も共ノ當れる訓あり又布佐波受とも訓べし△紀傳四十ノ原氏物語あぐみ布

○き身こころ祥ハしらぬ夕霧巻ノ寝殿の御ことひ

ハ祥ハしらぬ心の衣服とハ幸頃知た花宴巻ノ見えた

らず思ひて云しを浮舟

巻十ノ是愛たき御住ひの思深さを猶祥ハ治り新ノ見奉

不祥を然

思聞えて千習巻ノ附ノ尊ノ御方の被御ノ

る靖艶巻ノ五

佐賀那

志ノ人の心ならや祥ハ

思ふ事を別物思ふ事

布佐波受ノ云

布佐波受ノ云

許斯興呂志と有て不良ハ宜しう

反ノ宜しうず云ふ

祥の意ノ合へば彼河海抄ノ引れたる克叶ひたり又

万葉十八ノ等理戦奈久安豆麻乎佐之天布佐倍之尓

田可年登於毛信騰典之母佐祢奈之と有る布佐倍之

ノ行と幸を得ムとして行あり」と有ノ如記傳ノ

ハ此三の中ノて布佐波受の方を用ひて不良の訓を

附ノ れたるハ當れる言なり備右ノ余訶良受の余ハ

寄ノて寄べき事の寄合ざる謂あり布佐波受の布佐

ハ統る意あり神功皇后御紀應神天皇御紀ノ摂政を

布佐祢袁佐米多麻布と訓ミ顕宗天皇二年御紀ノ正

統萬機と有る此あり万葉十七ノ和我弊古我布佐多

千里家流と有を八ノ瞿麦花総手折と書る此あり

物名ノも麻を總と云事古語拾遺ノ見え草ハ藝多ふ

りと記傳ノ註さ

れる同意あり四神出生章第二ノ一書ノ悪字を佐賀

那志と訓れば其反ハ善字あれば通證ノ不祥無善也

と云る實ノ然る可し紀中ノ祥字善字性字を佐賀と

△此八十矛神
印歌ハ祭都史

ハ私記曰師説佐賀那志止読之安氏説佐伊波比那志
案古事記云余訶良受と有り但此安氏説ハ如何あれ
ども佐賀那志も余訶良受も共ニ當れる訓あり又布
佐波受とも訓べし△記傳四ニ源氏物語あゞミ布
佐波志加良受と云語所〻ニ在中ニ花宴巻ニ見えた
る河海抄の釈ハ不祥日本紀と有り斯れハ不祥を然
訓る本も有つと見えたり」と有ガ如し△但此ハ佐賀那
志と訓べきあり右の余訶良受ハ記傳ニ引れたる聖
武天皇御紀宣命ニ天下君坐而年緒
長久皇后不坐事母一豆乃善有努行尓在と見え無仁
天皇二十八年御紀ニ非良何從あゞ有り布佐波受ハ
記傳ニ八千矛神の御歌ニ之て許礼波布佐波受云て
許母布佐波受云〻許斯與呂志と有て不良ハ宜しの

反ハて宜しうゝず云あり又今世の語ニ物の相應
て幸有を布佐布と云ひ否を布佐波奴と云ふ是不
祥の意ニ合へハ彼河海抄ニ引れたる克叶ひたり又
万葉十八ニ等理我奈久安豆麻乎佐之天布佐倍之尓
由可年登於毛信騰典之母佐祢奈之と有る布佐倍之
ふ行とハ幸を得むとして行あり」と有か如し△記傳ニ
ハ此三の中ニて布佐波受の方を用ひて不良の訓を
附るハたるハ當れる言あり備右ニ余訶良受の余ハ
寄ハて寄べき事の寄合ざる謂あり布佐波受の布佐
ハ繞る意あり神功皇后御紀應神天皇御紀ニ摂政を
布佐祢袁佐米多麻布と訓ミ顕宗天皇二年御紀ニ正
宇里家流と有る此ハ万葉十七ニ和我勢古我布佐多
物名ニも麻を總と云事古語拾遺ニ見え草ハ藝多ふ
りと記傳ニ註さ折と書る此ハ曜麦花縒手
れる同意あり四神出生章第二一書ニ悪字を佐賀
那志と訓れハ其反ハ善字あれハ通證ニ不祥無善也
と云る實ニ然る可し紀中ニ祥字善字性字を佐賀と

△無仁天皇三十二年御紀ハ是ハ不良と有をも然訓り

訓るハ眞心ハ謂わて古語ハ惟神あゞ云ハ等しく天神より稟得たる任わして次うも修飾ハず潤色らざる美善しき天然ある性を云るなれば此の唱和も先陽神次陰神と云次序あゝむハ天性の任わして神隨ある所なれども其理ハ違ハせ給へる故ハ不祥と宣へり」あり△記傳ハ性を佐賀と訓る是古語ハて後り其ハ元より自然ハ憂世ハ佐賀あゞ云も此ハ能叶へ志ハ其反わて自然ハ然有べき事を云言あり佐賀那て此も古語と聞ハ垂仁天皇三十二年御紀ハ夫君王陵墓埋立生人是不良也推古天皇ナ六年御紀ハ大国客等聞之亦不良乃敢之と有り」と云れたる寔ハ然り○宜以改旋ハ宜以改言の意ハ見べきなり第一ノ一書ハい妹自左巡吾當右巡と

有故ハ後ハ故二神改復巡柱陽神自左陰神自右と云る其ハ柱の巡を改給へるなれども此と古事記の傳ハ柱ハ始より陽神ハ左より陰神ハ右より旋給へれば巡ハ於てハ異り無れども今度ハ陽神ハ先ハ唱へ陰神ハ後ハ和へむとなれば御言を改給ふ事ハ有れども其ハ又国柱を分巡りして唱和し給ふ事なる故ハ宜以改旋と云ハ有ありけり古事記ハ（天神云と記る）因女先ハ言而不良亦還降改云し此も上ハ如何婦人反先言ず と有ハ照し見ハ疑ひ無くむ故ハ改過なるどの改ハして事を新ハ為るを云あり次ハ二神却更相遇と有る是其謂ゆる改あり万

葉二十一ノ十一ノ年月波安良多安良多尓と有ハ新しみ
あれども改しる意あり今本ハ安多良と〻と有ハ
今春上ハ百千鳥囀づる春ハ物事ハ改まれども我ぞ誤あり今ハ宜本ハ依れり古
旧り行く」と有を合せて新し改しと同じきを暁る可し
○却更相遇ハ第二ノ一書ハ陽神自左陰神自右既遇之
第五ノ一書ハ故為不祥更復改巡と有る是あり然れば
此の却字も復と訓べきあり先ハ在し事を後ハ復亦
重て行ハせ給ふ義あり此を加閑理氏と訓む時ハ先ハ
元の所ハ復らしし事と成れり其ハて ハ第一ノ一書及
古事記と合ざるあり但其ハ其此ハ此ハて傳の異か
るありと云ハじ事も無くむあれども餘りハ事實を
失へるあれば強て此の却を復と同じく訓たるあり
相遇を米具理阿比多麻比努と有る其宜し上ハ分巡

明石巻 六十六宮
柱巡り逢ける時し省れば別れし春の恨殘すふ」と有て此の文を取て詠る者あり

国柱同會一面と有と同じ事を復し殊更ハ行給へる
あれば古事記ハ行廻逢是天之御柱云と故尓反
降往廻其天之御柱如先と有ハ合せる訓る者ある可
し旧事紀ハ巡行天柱會逢同處と有れば相遇をも
阿比阿布あと訓べきが如くあれども其ハて餘
かふ路ハ言葉 ○是行也陽神先唱曰憙哉遇可美少女焉 少女 此云
鳥等孤 此ハ陰神の御和有べきを又略き漏されたり先
度ハ陰神の耳有て陽神のを挙られざると同例尓
れども甚し謂れ無き事ある由上ニナ一ノ一ハ云るが如し
第五ノ一書ハ此ハ同じく陽神先唱曰美哉善少女
遂符合交と有も事省たる記し様ハて此ハて唱和
ハ成ざる者を ○因問陰神曰云と思欲以吾身元處合

汝身之元處と云迄の文此ハ在ハ記者の誤ハて上ハ
以磯馭盧嶋為国中之柱と有ハ継て有べき文なり然
るハ二神其嶋を探得て天降著しけるハ地質ハ感け
て久代(ソノカミ)より隱身ありし神の始て顕身と成給へりけ
れハ彼天浮橋の仆伏て久志比濆と成れるが如く霊
しき奇しき坐て陽神先其成れる御身を見行し次ハ陰
神の御上を明給へるあり然るて此ハ(那)餘れり其ハ不
足と所知食し定めて其より媾合の事を所思し立給
へるあれハ彼唱和ハ已ハ御合坐むと為る時ハ在し
事古事記ハ殊ハ正しく次てハ此の第一ノ一書の趣ハ

善うめけるハ(旧事紀ハ始ハ古事記を取て成餘處ハ不成合處あるを事を記せるを此紀
ハ習ひて次度の唱和ハ後ハも此の如く雄元之處ハ雌
元之處云と の問答を加へて同じ事ハ二度有ハ殊
ハ拙き事なり)○汝(身ハ汝)を伊麻斯と訓る其も悪くハ非れども此
ハ吾と對へるあれハ那賀美ハと訓べし記傳四
ハ汝ハ常ハ漢文訓ハハ那牟遅と云ひ上代の歌共ハ
多く那と詠と又那礼と云も吾を和礼已を已礼と云
如く汝を汝礼と云あれハ又那兄(敦方)那弟ハ汝兄汝姉なり
冗茶天皇御紀ハ汝者此之奈鼻苦と見ハ又汝命など
云る皆那を本としたる称なり斯れハ汝を那と云ハ
本ありける」と有ハ如し 右の那牟遅ハ年遅ハ大日霎
貴又大己貴神など申す貴ハ

て掌詞あり源氏物語女巻に伎年遜等は同じ年なれども
云と」と有るは君歟あり細流に其を汝等也と有り備
右の年遜は武智麻呂公傳に義取茂栄故為名と有る
如く茂栄の義を以て称ふるあり又和礼已礼汝礼と
下に属て云は有て其状を云あり
但汝を汝礼と云は押る意添るあり 那は名あり已に
引る景行天皇の大御命に大倭国者以行事負名国也
と詔給へる如く化て神も人も何某と名に負ふ事は
しも其行事に依れるが故に物有て名無き事無く名
有て物無き事非ざば此を以て其物に対して汝と云
事と成れり者あり然れば其人の名を云ずして
其人を指ては那と云事あるを其人兄なるは汝兄と
云ひ妹なるは汝妹など下に其類の目をも添て呼事あり

名と云事の所由傳四五十六丁に委しく云るが如し
今は汝と云は畢しめたる意なれども上代は敬ひて
云事あり沼河比賣又須勢理毘賣命の歌に其夫神
を那なるあり建内宿祢の歌に天皇をしも那賀美古夜と
申せり 又伊麻斯は記傳の右の続きに別れたる万葉十一十四に
伊麻思毛吾毛事應成十四五丁に伊麻思乎多能美高野
天皇御紀詔に天下方朕子伊末之仁授給ふと又万葉
十四十七に奈礼毛安礼毛と有を一云麻之毛安礼毛と
見え源氏物語女巻に麻斯が常に見るむも羨ましきを
と有を細流に汝なりと有り又美麻斯とも云り続
紀九十六に藤原宮に天下所知美麻斯乃父坐天皇
乃美麻斯に賜志天下之業止云と食国天下之業乎吾

傳五伊弉諾尊
伊弉冉尊の下に
云り

子美麻斯王ニ授賜譲賜詔三十一十五ノ美麻之大臣乃万政悉以云〻彌麻之大臣之家内子等云〻あゞ有る是あり備右の麻斯伊麻斯美麻斯の三を汝字の意ハ用ある事ハ一も如何と云ハ麻斯ハ坐あり伊麻斯ハ在あり美麻斯ハ御座あり若て古ハ尊きを崇まへて大前とも御前とも前とも申す事常なるが其より差降るハ其在る所を指す直ハ故ハ麻斯とハ云へり〇然れば伊も美も上ハ添る辞なる事知知難きを強て思ふ事決きを伊の義鑄あゞの伊と同トうる可し〇備其麻斯の方の方重く伊麻斯よりハ美麻斯の方此上無く重き事右ハ引るを考べし〇有何成耶第一

〇者あり神樂譜前張の木綿作ハ来方ハ万志も加美曽也又万志も可見所と云ひ又来ハ幾美も可美所也と云ハ對へて未之も可美所と云ハ君と云程の事しら

〇勇士證ハ汝ハ言坐せと云り

〇源氏少女巻ハ麻斯ぐ常ハ見るうむも美すしまと

を云こゝと有を細流ハ泓ハ有りと云り然れハ麻斯ハ身主の義も有ハや

一書ハ有る共ハ古事記ハ汝身者如何成と有ハ依て何ハ成有正と訓て上の問ハ應ス可あり何字を伊加ハと訓る事万葉ハ多在り本の任ハ那迩能成禮流成て古意を失ふ事人の知ハ如し〇成ハ第一ノ一書ハ吾身具成而云〻吾身ハ具成而云〻と有る具成を成〻と訓ミ古事記ハも吾身者成て不成合處一處在云〻吾身者成〻成餘處一處在云〻と有る成ハて二神始て顯身と成出給ひて御體ハの成具へるを云あり上四十六下ハ云る如く人の産生るを成と云とハ異ハて此ハ御體の上ハ成へる事を問懸させ給へる者あり其ハ古事記詞志宮殿ハ此太子所賢大

輔和兼命者初所生時如輔宍生（より御腕）故著御名と有る生を古く那礼利と訓る是あり應神天皇御紀に右の宍生腕上と云所に於比多理と訓れども其は正実に叶はず此は陽神陰神共に素より隱身に御在しけるを此時に始て顯身と現出給て共に御體の成具り御面足（まし）坐しうは陽神其御自の上に少異（イサカケミカ）在りと所思（す事有）しうば陰神の御上を問はせさせ給へりしあり偖成を那須と云へば（已が）然爲る事あるを那流と云は自然るあり玉と此は彼高皇産靈尊神皇産靈尊の預鎔造り坐るが其作られ奉給ふ（此）神の御上に取ては自然に成れる事の如し有し故に那礼流と云は立に宣はしまあり此は世に顯身と生出る人の形體の定り成れる始めし有けれは甚く容易き事に非る可く想像奉らるく事あり

○傳四高皇産靈尊神皇産靈尊の下に註せる事共を見又其に引る顯宗天皇御紀なる日神日神す御託し言又拾遺集に君見れば産靈の神か恨めしさ難面き人を何造りけむと詠るなどを味へ知べき者あり

○吾身は阿賀美と訓べし汝身を那賀美と云る對あり吾を阿と云は人に向ひて已を名告る時に親昵しむ意の甚切なる時に限れる事あり其中に夫婦の間などは殊に深く思交して親昵しむ意の甚切れる者なる故に多く阿とも阿賀とも阿礼とも云り然れば阿は狹くして和は廣きあり字も阿に吾和

古事記に明宮の佐那岐阿藝と有るハ吾君の右とハ別あり

ハ我字ヲ當れりけるハ四神出生章第七一書ハ吾夫君此ニ阿我儺勢と注され崇神天皇十年御紀ハ号叩頭之處曰我君と有を神名式ハ山城国相樂郡和伎坐天乃夫支賣神社大月次新嘗と有る地名を以知べし漢字の上ハてハ我ハ我国成朝なり廣き事ハ用ひ吾ハ已ハ係づらへる事ハ耳用ふるなり說曾文良比說文ハ吾我ハ自称せと云り古事記八千矛神の歌ハ和賀多々と勢礼婆比許豆良比和何多々と勢礼婆と有ハ未婚坐ざりし時なる故ハ和何と宣へるハ合せて沼河比賣の答ハと和何許々呂宇良須能登理叙と大凡ハ和何と云るなり又其神之嫡后須勢理毘賣命甚為嫉妬故其日子遲神和

傳三十九百九十九ハ注るが如く

備毘自出雲將上坐倭国云々歌曰云々年良登理能和賀年礼伊那婆比氣登理能和賀比氣伊那婆云々此ハ和賀と有ハ嫡后の許を離れむと為給へるが故なり然るを其嫡后の答給へるハ夜知冨許能加微能美許登夜阿賀流冨久迩奴斯許曾波云々阿波母與賣迩斯阿礼婆那遠岐氐袁波那志那遠岐氐都麻波那斯云々と有て此ハ夫神を留めむと為る故ハ阿賀と也波と也宜以て其甚切なる意を示奉給へる者ハ又日子穂々出見命の豊玉毘賣命ハ答給へる大御歌ハ意岐都登理加毛度久斯麻迩和賀韋泥斯と詠給へるハ已ハ有たし事ある故ハ和賀と有り又神武天皇の伊須氣余理の許ハ一宿御寢坐る事を須賀

多く美伊夜佐夜斯岐弖和賀布多理泥斯と詠せ給へるハ二柱の事を合せ給へる故ハ和賀と詠せ給へるなり古事記日代宮殿ハ倭建命云と故登立其坂三歎詔云阿豆麻波夜故号其国謂阿豆麻也と有を御紀ハ吾嬬者耶又吾嬬国とも作りたれバ阿ハハ正〳〵吾字ゟ當れりける万葉の歌ハ人しの心とハ書るを輪めたる故ハ吾と我と文字遣の差別ハ非れども訓ハ其意を得て附べき為の假字ハ阿賀とも阿礼とも有を試るハ和賀和礼ゟ云ハ用意別あり中昔の物語ゟ云ハ阿賀佛尊しゟ云一向ハ心の甚切りて云事ゟ知べきゟ為然れバ吾の阿ハ阿那とも阿ととも歎息く辞と等しく事の甚切れるハ云事ゟて上古ハ其差別正しうりし者と所見たり神武天皇御紀ハ皇軍大〳〵阿誤豫云〳〵阿誤豫と有ハ吾子と吾子とゟて御方を親しくて云ゟ有神功皇后御紀ハ忍熊王逃無所入則喚五十狹茅宿禰而歌之曰伊裝阿藝云〳〵と有ハ逃て入べき所無りし故ハ御方ハ参れる五十狹茅宿禰を咎未吾君と宣ひて其救を乞ハ〳〵なり又應神天皇十三年御紀ハ天皇宴于後宮之時云〳〵攜大鷦鷯尊以指髪長媛乃歌之曰伊裝阿藝云〳〵と詠せ給ハるハ其髪長媛を皇太子ハ合せ給ふ所ゟる故ゟり此等を以て阿の意を知べし　和賀ハ廣く云ふ我ゟりとハ古事記日代宮殿ハ美夜受比賣の詠る多迦比迦流比能美古夜須美斯志和賀意富岐美と詠るハ倭建命を　大君と申せるゟるゟ其を大君と指す我ハ已一人ハ非ず天下の人共ハ大君と仰奉る

事ある故ゐ此ハ其一統をゑふ我ある故ゐ和賀と有
り譬へハ万葉一ある藤原宮之役民作歌ゐ八隅知之
吾大王と有ハ天下の人と役民と一ゐ成て（云故ゐ此吾ハ和賀あり）
阿賀ゐハ非ず吾作日之御門尓と有ハ役民挙りての
吾ある故ゐ阿賀ゐハ非ず和賀あり我国者常世尓成
年と有ハ此も天下の人と役民とを統て我国と云る
あれハ本より和賀あり此を以て和と訓べき我の意
を知べし然れハ万葉ゐハ吾も和と訓べく我も阿と
正し読べき所の多在れハ能く心を得て訓べき事な
るが和賀とも和礼とも假字ゐて書るゐハ大凡ハ定

りの如く和ハ廣き方阿の狭き方ゐ用ひたり（今思ふ和ハ絲の索ぬたるを句と云ひ物ゐ輪と云ひ和珥臣を尤迩臣ゐど作る句輪尤ゐどの同言ある可し又和を礼と云ハ汝を汝礼と云ゐ同トきあり）○身ハ古事記ゐ云く獨神成坐而隱身也と云事三所ゐ出たり其を朝倉宮段ゐ天皇の一言主神ゐ白給へる御言ゐ恐我大神有宇都志意美者不覺云と有る宇都志意美ハ顯御身ゐて隱身の反あり天孫降臨章第二ノ一書ゐ大已貴神報曰吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事云と即幽被瑞之八坂瓊而長隱者矣と有る顯幽と同ト万葉一中大兄三山哥ゐ神代従如此尓有良之云と虚空毛嫡子相格良思吉と有て神と顯身とそ對へさせ給へり発語ゐ虚空之云と有ゐ皆借

字ハて顕〻き身又顕の身
ありと冠辞考ハ有が如し又美を麻と云り皇御孫尊
〻申奉るも孫ハ借字ハて身と申す義ハり其ハ儀式
奏御ト儀ハ御體と有る下ハ詞云於保美麻と有を以
知べし此外ハハ身を麻と云事多在り右云と出たりム又年とも
云ハり四神出生章ハ一書ハ身中を年久呂と訓と
筑前風土記ハ宗像大神自天降居境門山之時云と以
此三表成神體之形納置即隱之因曰身形郡と見え
明天皇二年御紀ハ田身山名曰太務と注されなり其
餘紀中ハ身毛津若田身輪邑身狹 あと身を年ハ
用ひなり景行天皇二十八年御紀ハ形則我子實則神

ム但人の死を麻加流と云ハ身枯と云義ハり學を麻那布と云ハ身並ハて都ハる人と並ぶ事を為るハり招を麻祢久と云身労ハて労らふハり

ム又万葉九ハ如己男有ハ身の同ト項ハ己の男と云事ハり然れハ身も毛も云ハり

人と有る實ハ身實ハり胸ハ身根ハ身代ハて其人結ハ身繋ハ得身生ハ身為ハる事傳四産霊の下ハ注せるを見て知べく又此の始ハ産生洲国と云所ハも云ハム右の如く麻と美とも年とも云事ハるハ其本義を探索るハ人の形體を成す物實ハ一も凡以て呼吸と成り火を以て温暖まり金以て骨髓と成り水以て津液と成り土以て皮肉と成り毛髮と成て此五の物聚ぶり圓在れる上ハ此を使令ふ天神の御霊此ハ備るハり知名杼ハ腦會一云天窓知名阿太蒿と有ハ天霊の義ハり又腦頭中髓腦也知名奈豆岐と有ハ名著ハて名ハ成ハる事已ハ註る如一其天霊ハ君主

みして耳目手足の臣下を使令ふ事わて神見むと為れば目此わ従ひ神聞むと為れば耳此わ従ひ神把むと為れば手此わ従ひ神行むと為れば足此わ従ひて耳目手足ハ皆其神の心の任わ使令ると事わて毛髪の末迄も遺す事無し又同按わ頂顙頭上也伊太々伎る有も尊者あり賜ハる物わ戴く云如く天神の御霊載持つ称あり如此く諸物の聚在り合混りて人身と成れるあり万葉一十六なるハ群肝乃ゐて臓腑の群在れる中の心と続けたるあり和名按わ腎和名無良止と有ハ群後わて背の方わ倚れる由あるを以て後と云あり又脛脚脛也古無良と有ハハ群あり又雄略天皇四年御紀わ此疾飛来曙天皇臂と有る其大御歌わ陀

倶符羅ふと有を古事記わ多古年良と有れば臂ハ手の脛ある申あり又和名按わ脹膏和名阿布良と有ハ上群わて油の性として然れば人の已ふ事を麻呂と上わ浮て群かるを云ふ云ひ名わ属て某麻呂と云も麻呂ハ身と云事ありけり古事記明宮段わ見えたる吉野之国主等の歌わ宇麻良尓岐許志母知袁勢麻呂賀知と有る麻呂賀知を政事要略わ引るわハ九賀朕と作れども身之君と云事あるを以思ふわ身體の成れるを就て云ハ年良あり成れる上わて唯身の事を云わい麻呂と云例と聞内年良麻呂相通ふ由ハ傳三渾沌の下わ云り俗わ人を一箇のわ天地と云も然る事あれば能く其條と考合す可

く又傳四天御中主尊高皇産靈尊神皇産靈尊の件と
ゐ云る御又皇の義をも合せ見て曉る可し　自の事を麻呂と云
ハ古今集序ゐ大麻久良詞ハ云くと有を京都角倉氏
ゐ藏る北畠本ゐハ麻呂良と有り其ゐて聞えたり源
氏槇柱巻ゐ麻呂か爲ゐも云く麻呂等をも云る　○有
あと其外中昔の書共ゐ多く有る事ゐあり
一雌元之處の一字訓へうゝす次ゐハ唯雄元之處と
耳有ハあり第一一書ゐハ吾身具成而有稱陰元者
一處と見え古事記ゐも吾身者成と不成合處一處在
と有る是あり古事記の不成合處と云るハ欽四て成
成合ゐ佛の御餝あゞ云ハ整らめ狀を云あり源氏東屋巻ゐ未
を云と有あゞ物の不足ある事を云るを思ゐ可し
雌ハ雄の對ゐ用ひたる字あり此を賣と訓事ハしも

松風巻ゐハ成合ふ程ゐ成給ひ帰り来屋巻ゐ未幼ゐく成合ゐ人を指越て云こ又嘉生巻ゐハ成合たる四ち給へる

彼成て成合る身中ゐ一處未成合ゐ狀ゐて乙一處
の出来ゐる之謂あり此事傳五十九ゐ已ゐ安一く注
せるゞ如し又（婦ハ上女伊呂涙ハ伊呂賣ある如く）　黄と根と通ふ事ゐて　古事記ゐ
生女島亦名謂天一根と有ハ傍ゐ速吸名門と云ふ大
地の陰門（ヒナト）の有る其ゐ依る名ある事已ゐ傳三七十二丁四
十三丁又三十八丁ゐ云る如ある也敏達天皇十二年御紀ゐ韓（カラ）
婦（ソノコ）用韓語言以汝之根入我根内即入家と有ハ韓語を
我古語ゐ改記されたるゞ根ハ素より男根ゐも云事
あれども（此なり人の生れ来る事ゐし有れバ）女陰を根と云一ゞ本あるゐて云ふ　案家漢語抄ゐ陰門
此奈登と有る此ハ彦姫の此ゐて奈ハ根登ハ門あり
其ハ和名抄ゐ揚氏漢語抄云吉舌和名比奈佐伎ハ陰

門より炎の出たる元處ハ右ハ根と云るハ同ト釈迦
由ハ名あるを可し　元處ハ右ハ根と云るハ同ト釈迦
義ハ凡男女初生之時先見此處乃定男女故謂之元處
耳下雄元又同之と有ハ然る事あれども雌雄相婚き
て子を産成す其元處と見るや勝る可らむ者あり
猶考定を待き
う一通證ハ易曰大哉乾道乃物資始至哉坤元乃物資
生精蘊曰元者天地之大德所以生之者也と有り
元字ハ其心ハて用ゐ好たる可し　○有雄元之處ハ常一ノ一書ハ吾身而
具成而有称陽元者一處と見え古事記ハ我身者成と
而成餘處一處在と有り右の古事記ハ成餘處と云ハ此
負坐る所縁あり源氏藤裏葉巻ハ雄元ハて面足と神名ハも
足ひ給ふ云く又下の心ハへ雄と雄しく速よらハ
ある反ハ物の足へる狀ハ云へるハ起れるあり此雄

以此吾身成餘處
剛塞汝身不成合
處と有と同し事ハ
と唯ハ尾と

ハ男根の称あり古事記朝倉宮段歌ハ麻那婆志良袁
由岐阿閉と有ハ雄行合ハて尾を打合す耳の事ハハ
非ざるあり　万葉ハハ多く向峯又ハ八峯あるの字を用ひた
るを和名抄峯和名三称又用下二字岑嶺山尖高處也と有
て三称ハ身根ハて男根の名又山尖高處也と有ハ男
根の形容あるを以知べし又　土高曰丘和名乎加と云
も右の例ハ依ハ雄處の義あり又嶽高山名也漢抄云
美太と云も身莖ハて男根ハ勢と云る是あり凡国土
の中ハて其大凡を云時ハ山海の二あるを海ハ女陰
ハ形し山ハ男根ハ象れる者ある事ハて人の形體ハ

異なるゝざる者あり猶山の御面と云ひ美冨登と谷を
久良と云あど互に通も云るを人にも跨を麻多
具良と云あど互に通ひし云る事多在り　古語拾遺に男莖形を袁波是賀
多と訓るも男莖形（狂）ある物うら猶雄　元形（ハジメカタ）にも有べ
し和名抄に玉莖男陰名也楊氏漢語抄云屎破前一云麻良云し
と有も破前（ハゼ）は右に同じく元（ハジメ）あるが次にはは唯に元處
と耳有を以て莖にも柱にも拘はゝずして云称ある
を知べし然れば雄と云るゞ正しく男根の古名にハ
有ける　右に雌雄の事を云るて傳三に註せる陰陽の
義又五に説る彦姫あでの義を此に合せて曉
る可し四神出生章第六一書に取湯津仇櫛齋折其雄
柱と有る雄柱を古く保登理婆斯良と訓来れるに依
て口訳に端（ハヅ）牙也と云るい然る事あれども上古の製
い其端牙を次う長く作れるに其尖りて有しうハ例

内閣文庫
図書寮文庫 消印

明治七年十七月九日校正　管政局

国立公文書館
National Archives of Japan